

人びとが創るもうひとつのアジア

ハリナ

HALINA

no.40 2018年5月

APLA 10周年記念特別号

Start!

2007~2008年

JCNCからAPLAへ組織変更の議論
1986年からフィリピン・ネグロスの元サトウキビ農園労働者たちの自立支援をしてきた日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC)の解散と新組織への移行が議論されました。

2008年5月17日

APLA設立総会開催

ネグロスに加えて、北部ルソン、東ティモール、インドネシアを海外パートナーとしてスタート!



APLA設立記念シンポジウムの様子。アジア各地のパートナーたちも参加。



10th Anniversary APLA's Footprint

10年間の主な出来事や活動をスゴロクで振り返ります。



2008年10月1日

特定非営利活動法人として登記

2009年7月

カネシゲファーム・
ルーラルキャンパス(KF-RC)設立



2013年1月

「ホンモノの
手作りチョコレート
ワークショップ」
スタート



初めて実施したワークショップの時の写真。

2013年11月

ヨランダ台風、フィリピン襲来
緊急救援実施



2014年11月

PtoPカフェ始動



アースデイマーケットを中心に出店。

2010年11月&2011年1月

フィリピン・東ティモール農民交流



東ティモールにて。



フィリピン・北部ルソンにて。

2012年4月~2013年2月

「福島百年未来塾開催」(計6回)
二本松有機農業研究会との活動開始



2011年11月

「福島の子どもたちに届けよう・バナナ募金」がスタート



ネグロスでの記念パーティー。

2011年3月11日

東日本大震災
福島第一原発事故



2011年7月

日本・ネグロス連帯
25周年

事務局スタッフも走りました!



APLA共同代表の秋山(右)とスタッフの寺田(左から2人目)。ネグロスでKF-RC卒業生の家族を訪問。



スタッフの野川。東ティモールにて、コミュニティのメンバーと話をしている。



スタッフの吉澤。ネグロスのKF-RCにてミーティング。



スタッフの大久保。バランゴンバナナ生産者とバナナ募金お届け先の保育園を訪問。



チャリティTシャツのJAMMINとコラボしてオリジナルTシャツも作りました。



アースデイ東京は年1回の大きなお祭り。毎年たくさんのボランティアの若者たちが来てくれます。

Contents

APLA 10周年記念特別号

- 02 10th Anniversary
APLA's Footprint
- 04 **フィリピン・ネグロス**
 - KF-RCスタッフたちより—これまでの農場を振り返って
 - KF-RC卒業生と父親からのメッセージ
 - BMW技術—フィリピンでのこれまでとこれから
 - ◎秋山澄兄
- 07 **フィリピン・北部ルソン**
 - フィリピン(ネグロス、北部ルソン)活動年表
- 08 **東ティモール**
 - 東ティモール活動年表
 - 東ティモールからのメッセージ
- 11 **インドネシア・東ジャワ**
- 12 **福島**
 - 福島活動年表
 - 福島からのメッセージ
- 14 **交流**
出会って、気づいて、つながって
- 16 **ホンモノの手作りチョコレートワークショップ**
民衆交際品を見て触って味わえる
キッチンカー「PtoP cafe」!
2016、2017年度開催
「友産友消のススメ」
- 18 **座談会**
この10年を振り返って
◎安藤文将、赤松結希、市橋秀夫、
箕曲在弘、吉澤真満子
- 22 **【APLAピックアップ】**
村井先生がつないでくれたババア
ハレスチナへの連帯
台風ヨランダ襲来
—緊急支援の難しさを実感
3カ国若手農民交流
—学び合いが生み出す農家の未来
私にとってのアンボさん
他団体とのコラボレーション
- 24 **APLAのサポーターたちから
メッセージ!**
- 26 **APLA10年にあたって**
—共同代表からのメッセージ
◎疋田美津子、秋山眞兄
- 27 事務局だより
- 28 APLA CAMPAIGN NEWS
collection

フィリピン・ネグロス Negros, Philippines

日本ネグロス・キャンベーン委員会(JCNC)からAPLAへの組織再編。ネグロスで培われた活動は、カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KFRC)へと引き継がれ、活動が広がっていった10年となりました。



研修卒業生が立てた豚舎前で。研修生と家族、KF-RCスタッフ。

務局長を務める。2016年にアンボサのスタッフが農場を支えている。第二期生からは6カ月間の研修プログラム

ラムを組み、第七期生まで計32人が研修を終えている。卒業した研修生たちが、地元に戻って循環型農業を始めるための初期投資として豚舎建設などをサポート

し、継続してコミュニケーションを取ること、アフターケアも実施。卒業後にも元研修生たちが交流を重ね、モチベーションの継続や困難なことを話し合える環境作りもしている。卒業後も農業を続けているのは16人、残念ながら事情により辞めてしまった子もいる。うまくいかなかった経験も踏まえて、スタッフたちは随時研修の内容や研修生の選び方を見直しながらプログラムを継続。将来は、卒業生たちが地域のモデルとなって、周り

の農民を支える存在になっていけるようにと試みは続いている。
農場の自立のために
KFRCのスタート時、APLAから農場への資金援助は最初の3年のみで、その後は財政的自立を果たすという目標を立てた。スタッフたちは養豚事業を中心に野菜や果物の売上で、自分たちの給与や農場の運営コストを賄うため、日々奮闘中である。スタッフは全員元農民。

KF-RCスタッフたちより — これまでの農場を振り返って

ピンピン・バルコマ / PingPing Barcoma
会計、マーケティング担当



初めは荒れ果てて何もなかった農場ですが、今ではたくさんものがあります。野菜や果物、家畜だけではなく、人とのつながりや知識、経験があります。昔は東ティモールやラオスの農民との交流なんて絶対できなかったと思います。農場で育った一番下の息子はもうすぐ5歳。将来何になりたいの?と聞くと「水牛で畑を耕したい!」って言ったのです。はっはっは! 毎日親の畑仕事を見ていて、農業の楽しさや有機農業のよさを自然に学んでるのかしら!

チータ・タカタ / Chita Tacata
理事、マーケティング担当



1990年代にバランゴンバナナ生産者協会(BGA)の副委員長としてJCNCに出会いました。昔からAPLA(JCNC)が一貫して力を入れていることが学び・教育です。JCNC時代のセミナーや教育プログラムが今こうしてKF-RCとなり、継続されています。次世代への教育は、有機農業を広めていくだけでなく、有機的なコミュニティをも生み出します。

30年以上も継続している活動、そして私もそこに関わり続けられていることがとても幸せで、ラッキーであると感じています。今のところリタイアする気はありませんが、もしリタイアしても頻りにKF-RCを訪問し、スタッフがしっかり働いているかチェックします! APLA/JCNCとの思い出は決して忘れることのできない私の宝物です。

KF-RC卒業生と父親からのメッセージ

KF-RC第三期生

ジョン・ベントウラ / Jonan Ventura



ジョンさん(右から2番目)と家族。

昔はやんちゃして飲んだくれた自分ですが、KF-RCでの研修で多くのことを学び、今は自分の畑で実践しています。結婚を機に両親から1haの畑を譲り受け、収入は多くありませんが、食へものは自分で育て、支出も少ないので、ふたりで生活していく分には問題ありません。卒業後に一度だけお金が必要となり街へ働きに行きましたが、今は結婚したこともあり、一生懸命まじめに畑で働いています。

今こうして立派な畑で頑張ることができているのは、両親と弟のジョネル(KF-RCスタッフ)のお陰です。研修生にとって、卒業後のサポートというのは何より大切で、これがないと、せっかく色々なことをKF-RCで学んでも、続けることができないと思います。KF-RC/APLAには今後もそこを重点的にやってほしいです。

KF-RC第四期生マイケルの父親

アレックス・リアネス / Alex Lianes



アレックスさん(真中)、マイケルさん(左奥)と家族。

この土地は先祖から受け継いできた土地。次の世代に引き継ぐため、私なりに工夫して耕してきました。有機農業に出会い、これこそが持続可能なものだと思います。

若者たちに地域で活躍してもらいたいと思い、息子のマイケルをKF-RCに送りました。彼が小さい時に私は病気を患って働くことができず、他の兄弟や家庭のことを考えると、家計が破綻してしまう可能性がありました。無理をすれば彼を小学校へ通わせることもできたかもしれないが、家族のために働いてもらいました。

KF-RCに送り出すときに「お前は周り比べて農家である時間が長い。研修をしに行くのだが、自分が何か教えられることがあればそれは伝えてくること。自分が何のために研修をしに行くのか常に考えながら過ごしてこよう」と息子に伝えました。研修から戻り、まず驚いたことは息子が作るラスワ(フィリピンの家庭料理のスープ)の味が以前とは違ったことです。私はこのとき初めてオーガニックのよさを舌でも理解しました。それから息子も、本当によく働き、家族のサポートをしてくれています。自慢の息子です。

J CNCからAPLAへ移行することになった背景のひとつには、土地闘争を経て、元農園労働者だった人々たちによる、個人農家のネットワークが生まれたことだった。個人農家の限界をどう支え合えるか、農地を守るためにも生産性を高めるにはどうしたらよいか、農民たちとの協議が続いた。今後の取り組む課題として出てきたのが、農業を学び合うための場所がほしい、後継者を育てたいという2点だった。農業はやりたくないという町をめぐす若者は後を絶たないが、都会に疲れて村に戻ってくる子も多くなる。ネグロスでは、依然として農業は「貧困・無学」の象徴であるが、「楽しい・儲かる」農業という価値観を、実践を伴いながら創っていく! ということになった。

第一期生として選ばれた。数年間ほぼ放置されていた農場を約半年かけて開墾するところから研修は始まった。最初は住む家もなく、壊れかけた屋根の下での寝泊まり。「何度か逃げ出そうと思ったけど、仲間たちと汗を流し農場を作ったことが自分の誇りだ」と第一期生たちが当時を振り返って話してくれた。14カ月の研修期間で、野菜作り、養豚、堆肥作りなど循環型農業の実践はもちろん、国内外各地から農場を訪れる様々な人と交流。卒業時の研修生たちの言葉から、農民として生きる意味、責任を持つこと、仲間を大切にすることが分かる。その後、スタッフとして農場に残った第一期生のエム・エムとジョネルが現在は事務局長と副事



KF-RC研修生第三期生から五期生までとスタッフたち。

フィリピン(ネグロス、北部ルソン) 活動年表

2008年	北部ルソン	CORDEVの有機堆肥プロジェクトへ融資
2009年1月	ネグロス&北部ルソン	ネグロス・北部ルソン農民交流in北部ルソン
2009年7月	ネグロス	KF-RCの第一期生受入、農場の復興開始
2009年8月	北部ルソン	CORDEVにBMプラント設置
2010年3月	ネグロス	KF-RC開所式
2010年6月	ネグロス	KF-RCにBMプラント再設置
2011年7月	ネグロス	日本・ネグロス連帯25周年
2011年9月	ネグロス	KF-RCを財団として登記
2012年8月	北部ルソン	マラビン溪谷にBMプラント設置
2013年4月	ネグロス	KF-RC卒業時の豚舎建設サポートを開始 [研修第三期生より]
2013年6月	ネグロス	JCNC時代から続いていた balancon 生産者協会(BGA)の奨学金制度を終了
2014年6月	ネグロス	KF-RC卒業生サポート基金運用の開始(子豚と餌代のローン) [研修第五期生より]
2014年11月	ネグロス&北部ルソン	アンボ、ギルバート来日(BMW技術協会の会員メンバーと交流)
2015年5月	ネグロス&北部ルソン	ネグロス・北部ルソン農民交流inネグロス
2015年6月	ネグロス	KF-RC研修生サポートのためのクラウドファンディング実施
2016年1月	ネグロス	KF-RC代表アンボ氏逝去
2016年10月	ネグロス	若手農民交流(東ティモール農民と)
2017年3月	ネグロス	若手農民交流(ラオス農民と)
2018年3月	北部ルソン	ヌエバビスカヤ州青果物卸市場(NVAT)にBMプラント設置

方向性に食い違いが出てきたことだった。お互いがめざす

地域の循環型農業を進めるための試みが続ける人たちを応援し続けている。(吉澤)

この堆肥作りのために、すでにネグロスで取り組んでいたBMW技術も導入。ところがしばらくすると、CORDEVはバナナの出荷量の減少や、他にも展開していた事業で経済的に立ち行かなくなってくる。CORDEVで中心的な役割を果たしていたグレッグ・ラシガンさんが組織の行き詰まりの責任を取る形で退職したことで、団体の求心力が低下。理事の多くも、有機農業技術の普及に熱心ではあるものの比較的裕福な低地出身の農民たちとなり、CORDEVの内実が変化していった。APLAの北部ルソンでの活動の目的は、先住民の零細農民との協働を進めることだった。お互いがめざす

地域の循環型農業を進めるための試みが続ける人たちを応援し続けている。(吉澤)

ナナの産地の一つであり、生産者の多く

の有機農業を後押しすることに決め、まずは有機堆肥製造のプロジェクトを支援

した。この堆肥作りのために、すでにネグロスで取り組んでいたBMW技術も導入。ところがしばらくすると、CORDEVはバナナの出荷量の減少や、他にも展開していた事業で経済的に立ち行かなくなってくる。CORDEVで中心的な役割を果たしていたグレッグ・ラシガンさんが組織の行き詰まりの責任を取る形で退職したことで、団体の求心力が低下。理事の多くも、有機農業技術の普及に熱心ではあるものの比較的裕福な低地出身の農民たちとなり、CORDEVの内実が変化していった。APLAの北部ルソンでの活動の目的は、先住民の零細農民との協働を進めることだった。お互いがめざす

地域の循環型農業を進めるための試みが続ける人たちを応援し続けている。(吉澤)

北部ルソン

Northern Luzon, Philippines

先住民民族である農民たちが活動した

部ルソンには、多様な先住民族の人びとが暮らしている。歴史的に差別を受けてきた一

が先住民民族である。この地でバナナの出荷作業を担っていた農村発展のための協同組合(CORDEV)とAPLAは2008年からパートナーとして活動を始めることになった。先住民の零細農民たちの有機農業を後押しすることに決め、まずは有機堆肥製造のプロジェクトを支援



マラビン溪谷に導入されたBMプラント。ギルバートさんと息子のボンさん。現在はボンさんが農場を引継ぎ、柑橘生産をしている。

谷で柑橘栽培に取り組みイフガオ族のギルバート・クミラさんが自分の農場で実践を始めた。日本から温州ミカンの苗が持ち込まれ、日本人が技術を普及し、現地では「サツマ」の愛称で親しまれている。1990年代からマラビン溪谷はそのサツマの一大産地となった。外国資本の鉱山開発が地域周辺で進むなか、自分たちの土地を守るために柑橘栽培を拡大してきた。ただ、数年前から農業や化学肥料の多用で地域環境が汚染されていくのが目に見えるようになり、異常気象で柑橘の生産も不安定であることから、作物の多様化が進められるようになってきた。慣行栽培で収益を上げているこの地域の農民たちが、すぐに減農薬栽培、有機栽培に変えることは難しくとも、この地域で循環型農業を進めるための試みが続ける人たちを応援し続けている。(吉澤)

地域の中に循環型農業を

一方、BMW技術を北部ルソン地域へ導入し、その普及をめざすことは継続していった。農民が実際に試してみたい地域に合った技術に育てるため、グレッグさんの友人で、ヌエバビスカヤ州マラビン溪谷で柑橘栽培に取り組みイフガオ族のギルバート・クミラさんが自分の農場で実践を始めた。日本から温州ミカンの苗が持ち込まれ、日本人が技術を普及し、現地では「サツマ」の愛称で親しまれている。1990年代からマラビン溪谷はそのサツマの一大産地となった。外国資本の鉱山開発が地域周辺で進むなか、自分たちの土地を守るために柑橘栽培を拡大してきた。ただ、数年前から農業や化学肥料の多用で地域環境が汚染されていくのが目に見えるようになり、異常気象で柑橘の生産も不安定であることから、作物の多様化が進められるようになってきた。慣行栽培で収益を上げているこの地域の農民たちが、すぐに減農薬栽培、有機栽培に変えることは難しくとも、この地域で循環型農業を進めるための試みが続ける人たちを応援し続けている。(吉澤)



KF-RC見取り図

- 1 田んぼ、トウモロコシ畑
- 2 セミナーハウス
- 3 BMWプラント(飲用水タンク)
- 4 研修生の家
- 5 鶏舎
- 6 小川
- 7 みみず堆肥場&野菜畑
- 8 DOEI(旧堆肥製造工場)
- 9 野菜畑
- 10 バグサカンセンター(直売所)
- 11 豚舎
- 12 BMWプラント
- 13 ランブータンの木
- 14 カネシゲパーク
- 15 入口



作者のジャーニー・ザモラさん。

KF-RCの基幹技術でもあるBMW技術。ネグロスとの関わりはさかのぼること1996年から。その後、北部ルソンまで広がっていったこれまでの歩みについて書いていただきました。

BMW技術 フィリピンでのこれまでとこれから

秋山澄兄 / あきやま・すみえ
BMW技術協会事務局長

BMW技術(注1)は1996年にネグロス島のカネシゲファームに、2001年にツプラン農場(注2)に導入されましたが、当時は地域農民の技術としてBMW技術を根付かせることができませんでした。理由としては、サトウキビの単一栽培への依存が高く、自立的営農を志すという姿勢が弱かったこと、またBMプラント(注3)の規模が大きくなり、管理方法や生物活性水の活用方法などが、当時の農民に合わなかったなどがあげられます。その後、2つの農場の活動停滞により、BMプラント自体は小型化し、当時JCNC駐在員だった大橋成子さんの自宅で存続。08年に北部ルソンのCORDEVからグレッグ・ラシガンさんがネグロスを訪れ、大橋さん宅のBMプラントとその効果に触れ、北部ルソンの自宅に設置。翌年の09年にはCORDEVにもプラントが設置されました。10年にはKF-RCとして再生した農場でBMW技術を基幹技術として再び導入。13年には北部ルソンのギルバート・クミラさんの農園にも導入され、18年はギルバートさんがマネージャーを務める北部ルソン最大の青果物卸市場にBMプラントが導入されることになりました。市場に野菜を卸す農民たちが自由に使える仕組みを作っているところ。最初の導入から22年、一度火は消えかけましたが、再燃し現在に至っています。

これから

22年経ち、抱える課題は依然として変わってはいませんが、その中身が徐々に解消されてきている手応えがあります。農民を取り巻く環境も変わってきました。KF-RCのスタッフをはじめ、若い世代が

ただ技術を使うだけではなく、自然浄化作用の仕組みや畜複合の地域循環型農業の考え方、そして有機農業を続ける意義など、BMW技術の持つ理念を彼らなりに理解していることも強みです。22年間、関わった人たちの汗や経験、知恵が積み重なってできた軌跡は絶えることはありません。今後は北部ルソンの農民にも広がっていく可能性があり、農民たち同士が技術交流をはじめ、現在ゆっくりと進めているバイオガス発電も加わると、近い将来また違うBMW技術の在り方を見ることができると期待しています。



ギルバートさんの農園にBMプラントを設置中。KF-RCからスタッフも参加して。

BMW技術は理念と技術の両輪

BMWは、B(バクテリア=微生物)、M(ミネラル=鉱物)、W(ウォーター=水)の頭文字をとったもの。微生物の働きで、生き物によりミネラルバランスに優れた水を作り、それを農業や環境浄化、暮らしの中で使う技術です。BMW技術は「技術と理念は両輪」とし、理念は自然の理にあった技術を使い、地域にあった方法で持続可能な循環型社会を創造し、自然と共存していくこと。文明社会がもたらした仕組みの目詰まりを直し、そのうえで自然環境に適した方法で「もの」「地域」をつくり、人を育てていくことです。都市と農村、生産者と生活者、日本とアジアというつながりもつくっています。

- (注1) BMW技術: バクテリアとミネラルの働きをうまく活用し、土と水が生成される生態系のシステムを人工的に再現する技術のこと。
(注2) ツプラン農場: 1987年に、ネグロスの貧しい人びとが有機農業や適正技術の研修を受けられ、生きていくのに必要な知識や技術を学ぶために設立された。
(注3) BMプラント: BMW技術を用いて生物活性水を生み出すプラント。

抱いた「集う場所がほしい、若手を育成したい」という夢は、KF-RCの取組みを通じて形として見えてきたように思う。初代代表のアンボさんは、卒業生が暮らす地域に小さいながらもKF-RC

のサテライト農場が生まれる重要性を熱く語っていた。「砂糖の島ネグロス」の農民たちが、自分たちの力で生きていく試み。そのチャレンジは、KF-RCや卒業生たちに引継がれ、続いていく。(吉澤)

東ティモール

East Timor

ネグロスの経験を東ティモールへ
— コーヒー生産地で農を軸にした地域づくりを

東

ティモール民主共和国は、2002年に主権回復（独立）したアジアで一番新しい国。24年間にわたるインドネシアによる占領や1999年の住民投票後の民兵による焦

土化作戦によって、東ティモールの国づくりは、文字通り「ゼロからの出発」となった。そうした状況下で、国際機関や多数の国際NGOが東ティモール各地で支援プロジェクトを展開しているものの、

現実には、インフラやモノの一度限りの支援やトレーニングを数回実施しただけで撤退してしまうというケースも多く、問題の根本は解決されていないという話をたびたび耳にした。また、元々あったコミュニティ内での相互扶助の仕組みが支援によって破壊されたという問題も深刻だった。

東ティモールで活動を始めるに当たって

J CNCからAPLAへの移行準備期

間には、共同代表の秋山や事務局の大橋と吉澤が現地を訪問し、現地の農民支援団体（HAKADA、KSIといったNGO）と議論を重ねたところ、フィリピン・ネグロスでの長年の活動経験をもつAPLAを通じて日本やアジアとのつながりが必要としている人びとは多くいる、との声が聞かれた。そうした議論を経て、APLAとしては、アジア地域の農民交流や土地問題に対するキャンペーンなどの展開を検討するところから動き出した。並行して、現地NGOによる農村実態調査や土地問題に関する調査を実施し、2009年から2010年にかけては、調査対象地の5つの農村において、地域が抱える問題やニーズ、希望や将来の夢などを農民自身が議論するワークショップも開催した。

補足になるが、APLA設立以前より東ティモールのコーヒーを輸入していたATJが、2007年からは現地の農民支援団体のメンバーと共にコーヒー豆の集荷および加工所を運営するという新プロジェクトを発足させ、それが2009年の現地事業体のオルター・トレッド・ティモール社（以下、ATT）設立へとつながっていくという経緯がある。

そうした現地事業体の設立もあり、2010年には、APLAで東ティモール事業担当としてフルタイムスタッフになった野川が現地に長期滞在し、合計7つの農村にホームステイしながら、日々の



【写真①】 北部ルソンの山間地で限られた土地を有効に活用した営農について学ぶ。

2013年9月	森林農法およびコーヒーの手入れワークショップ開催
2013年11月	GATAMIRにて、住民参加型の水源保全活動のワークショップ開催
2014年9月	森林農法およびコーヒーの手入れワークショップ開催（2年目）
2015年2月	Fitun Caetanoにて、住民参加型の水源保全活動のワークショップを開催【写真②】
2015年4月	女性メンバーを対象にした食品加工のワークショップ開催 省エネのための簡易かまど設置のワークショップ開催
2016年2月	Lekisaraにて、水源保全・植樹・学校菜園のワークショップ開催
2016年8月	コーヒー生産者グループの地域の小・中学生約150人を対象にした子ども環境キャンプ(Perma Kids Camp)開催【写真④】
2017年度	コーヒー産地の4グループにて、果樹の多品目栽培のための苗場の整備【写真⑤】
2017年4月	若手農民交流実施(フィリピン、ラオス農民と)
2017年8月	第2回Perma Kids Camp開催。エルメラ県の4地域から23人の小・中学生の参加をサポート
2017年11月、12月	エルメラ県エルメラ郡およびハトリア郡の中央小学校にて、教員向けの学校菜園ワークショップを開催

東ティモール活動年表

2008年度	現地NGOによる農村実態調査、土地問題に関する調査
2009年度	上記調査対象地における「農村ニーズ・ワークショップ」開催(5カ村)
2010年8月	コミュニティ・グループの経験共有ワークショップを開催(ティリ)
2010年9月	2つのコーヒー生産者グループとの「コーヒーだけに頼らない地域づくり」に向けた協働開始
2010年11月～12月	フィリピンの農民との交流inフィリピン【写真①】
2011年1月～2月	フィリピンの農民との交流in東ティモール
2011年度	女性メンバー対象の家計管理ワークショップ、食品加工ワークショップ開催【写真②】 土壌改良ワークショップ開催 淡水魚の養殖のための研修をサポート
2012年2月	ATTのコーヒー生産者12グループ(計213世帯)に対し米の緊急支援
2012年11月～2013年10月	若手リーダー育成のための実地研修プログラムをPermatilの協力で実施
2013年3月	「農民による自立的・安定的な地域づくりのための協同」セミナー開催。産直市場グリーンファーム会長・小林文彦氏を招へい
2013年8月	Permatilエゴ・レモス氏によるアグロフォレストリーセミナー開催

【写真②】 Fitun Caetanoの女性メンバー。家計管理ワークショップを終えて。

暮らしの様子を参与観察し、地域が抱える問題に関して議論を重ねた。その結果、ATTがコーヒーを買い付ける地域であるエルメラ県レテフォホ郡ハウプ村のフィトゥン・カイトノ(Fitun Caetano)、同エルメラ郡メルトゥット村のガタミル(GATAMIR)という2つのグループと共に、持続可能な農業技術の普及や地域内の小規模ビジネスによる収入の多様化、言い換えれば「コーヒーだけに頼らない地域づくり」をめざしていくことを決定した。この2つのグループは、議論の中でAP

LAから繰り返し伝えた、①長年ネグロスの人びとと共に積み上げてきた失敗や成功を共有し、経済本位でない「豊かな暮らし」を一緒に実現していきたいという想い、②モノやお金を供与することはないが、人と人との交流や学び合いをベースに地域の活動に寄り添っていききたいという想い、それらに共感・共鳴してくれたグループだった。

そして、まずは農民交流ということ、2010年から2011年にかけて、フィリピンのネグロス、北部ルソンの農民との相互交流を実施。それにより、上記2つのグループのメンバーの意識に「地域にあるものを活用して、自分たちの地域を自分たちの力で豊かにしていくことが可能だ」という意識の変化が生まれ、収入多様化のための様々な試みにつながっていく。

多面的に広がっていた 現地での活動

その後も、現地駐在員は置けないながらも、ATTの社会事業担当スタッフや現地スタッフ(2012年以降は助成金を活用して雇用)の奮闘にも支えられて、多くの失敗や小さな成果を積み重ねながら、活動を継続、深化させることができた。また、東ティモール国内でパーマカル



チャール（風土にあった持続可能な農業の普及を長く実践してきたNGOのPermati）との協働は、地域住民にとってもAPLA自身にとっても大きな力となった。紙面の都合上、詳細は年表に譲るが、各家庭や地域での栽培作物の多様化、農村青年の研修・育成、水源保全、子どもへの環境教育と学校菜園の普及など、多くの活動はPermatiやその創設者であるエゴ・レモスさんの協力なくしては実現することができなかった。循環型農業や環境保全活動は、APLAとしては珍しく複数の助成金を活用しながら、その効果の最大化に努めてきた一方で、それ以外に生協や別の市民団体からの支援・協力を受けながら、コーヒー産地の女性の組織化および食品加工などの小規模な



経済活動のサポートも進めてきている。
（野川）

（注）東ティモール・エルメラ県にて実施してきた水源保全活動。その活動の意義について、東ティモール国内の他の地域の人たちにも広く知ってもらうために制作した動画（動画）を公開。日本語字幕版が以下のリンクからご覧いただけます。
<https://www.youtube.com/watch?v=nbfSYFLVRY>

【写真③】整備した泉、ため池の上方に多様な木を植えることで、土地の保水力を高める。

（上）【写真④】キャンプ最終日の朝。参加者全員で輪になってスタート、
（下）【写真⑤】ランブータンの苗づくり。

インドネシア・東ジャワ

East Jawa, Indonesia

エコシュリンプの生産者との連携を進めてきました。

2 008年のAPLA設立以後、ATJおよび現地会社のオルター・トレード・インドネシア社（以下、ATINA）と協働して、エコシュリンプの産地における持続可能な地域づくりをめざした取組み、エビの生産者と消費者をつなぐ取組みを進めてきた。フィリピンや東ティモールでの活動とは異なり、最初に事業体（ATINA）が存在し、その事業地での運動の展開を模索する形となったインドネシア・東ジャワでは、現地側で運動の主体となるパート

ナーから随時要望を受けて、活動への協力。後方支援に徹する色合いが強かった。そうした姿勢自体はAPLAの方針に沿ったものではあるが、同時に、パートナーの変化に大きく左右されることもまた事実である。

具体的には、初期は、東ティモールの農民との交流なども計画していたが、OCeANの解体に伴ってそうした計画は実現できず、KOINの誕生によって、エビ養殖池近隣の環境保全に関する取組みの推進にシフトしてきている。

また、現地での活動とは別に、APLAならではの事業として、エビの生産者と消費者の相互理解のための交流や広報を展開できたことは大きな成果だったと

（注1）OCeAN（オーガニック・コミュニケーション・ネットワーク）の略。エコシュリンプの産地における社会活動を担う組織として、2008年7月まで活動（命・自然・暮らしを守る）を基本理念とし、環境・社会改善運動を有機技術の開発、その普及を実現するために活動を展開した。

（注2）KOIN（インドネシア環境保全の略。ATINA社スタッフとエコシュリンプ生産者の有志で2012年5月に設立したNGO。活動の主な目的は、①持続可能な環境を創造・保全する、②エビの相放養殖を支える環境マネージメントを実現する、③より自然環境への改善と安全に向けた意識を地域で高める、④持続的・自然環境の保全を優先することを政府に働きかける。



石けんセミナー（2010年3月）
ATINA工場周辺やエビ養殖池地域での石けん運動展開の第一歩として、ATINAやエビ養殖池のある村、近隣の中学校などで、石けんセミナーを開催した。



ATINAエビ加工労働者スピーキングツアー（2011年2月）
ATINAより労働者3人を日本に招へい。2月19日には都内でシンポジウムを開催した。ATJと協力して、生協組合員（福岡、栃木、神奈川）との交流も実施した。

原発に関するセミナー（2014年3月）

KOINと協力して、ATINA従業員やエビ生産者を対象にした原発への理解を深めるセミナーを開催。福島第一原発事故の概況説明に加えて、福島県農協の苦悩を描いたドキュメンタリー『それでも種をまく』を上映。インドネシア国内のNGOスタッフによるインドネシアの原発建設計画に関する解説も盛り込んだ。



河川の水質調査（2017年4月～）

KOINとATINAがエコシュリンプの産地である東ジャワ・シダルジョの養殖池に流入する2つの河川で水質環境調査を実施。その調査結果を踏まえて、地域住民への具体的な行動提起ならびに県行政への働きかけも実施（パルスシステムの地域づくり基金からの助成）。



東日本大震災と原発事故を機に、APLAの具体的な活動地域に福島も加わりました。2011年3月からの福島との歩みをまとめました。

東

日本大震災と福島第一原発の事故後には、その事態に対してAPLAとしてどう向き合っていくか大きな議論になった。話し合っている中で出てきた意見としては「原発事故は、日本だけの問題ではない。世界的な課題、また構造の問題であり、その代替案をアジアの人たちとどう創っていくかがAPLAの役割ではないか」「アジアで有機農業や循環型農業の取り組みを進めているのに、放射能の問題を横において、福島の人たちだけで解決してください、とはいかないはずだ。農業をどう位置づけて人びとの生活を立て直していくのか、APLAとしては避けられないのではないか」「APLAはアジアと日本の人びとの媒介者であるべきで、福島での具体的な活動は必要ないのではないかな」などがあった。

そうした議論と並行して、事故後の実態を把握するために、各地で原発事故の被害者となってしまった人々たちを取材して『APLAレポート05』に記録した。そのなかで、二本松有機農業研究会と出会い、これから福島で何ができるか



デザートのバナナを食べるあすなる保育園の子どもたち。



APLAの福島ツアー(2013年12月)。あすなる保育園にて。

を一緒に考えようと、「福島百年未来塾」を6回開催した(2012年)。放射能を除去しながら耕作する方法、自然エネルギーについて、福島の地域をどう再生するか、経済のこと、政治のことなど、様々な視点から各方面の有識者の方たちの話を聞き、参加者で語り合うことを繰り返していった。これがきっかけとなって生まれた「福島でもエネ

福島活動年表

二本松有機農業研究会との関わり	
2011年7月	二本松有機農業研究会を初訪問(その後10、11、12、1、2月に訪問)
2011年10月	APLAレポート05「東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故を受けて」発行。福島、茨城、栃木、静岡、千葉を訪問して原発事故後の状況取材
2012年	6回にわたって福島百年未来塾を開催
2013年2月	二本松有機農業研究会若手メンバーのネグロス訪問(BMW技術協会のツアーに参加)
2013年4月	APLAレポート06「国境を越えて『3.11』以後を歩む」発行
2014年2月	再生可能エネルギードイツスタディツアー開催
2014年3月	日独再生可能エネルギー懇親会開催
2014年11月	フィリピンの農民(アンボ、ギルバート)二本松有機農業研究会訪問
2016年9月	ソーラーシェアリング・パネルサポートキックオフ集会開催(注) 「農民発電」カカオクッキー発売開始、パネルサポーター一制度開始(注)
2018年1月	「再生可能エネルギーが地域を豊かにする」開催 パネルサポーター交流会実施
2018年2月	ドイツ脱原発倫理委員会メンバー・ミランダ・シュラーズさんと「脱原発を決めたドイツと福島について語り合う」開催



福島百年未来塾。大会場での講義の後には、車座になって語り合った。

ルギーの自給をしたい」という、二本松有機農業研究会の皆さんの熱い思いに共鳴し、今日までその歩みを共にしてきている。この背景には、APLAがネグロスとの出会いから、そこで生きている人々に寄り添って活動を進めたJCNNCの経験が引き継がれている。具体的な出会いや関

係性の中から社会や世界を見つめ、行動に移そうとするものである。その後、APLAでは、意識的に福島とアジアのパートナーの交流も進めてきている。もう一つ原発事故後に始まった取り組みは「福島の子どもたちに届けよう・バナナ募金」である。JCNNCは、ネグロスの飢餓で苦しんでいる子どもたちを救うための緊急救援から始まった。福島でも放射能被ばくにさらされている子どもたちがいる。バランゴンバナナの生産者たちからは、震災直後、被災した人たちが

へバナナが届けられ、その他のアジアのパートナーからも義援金が届けられた。単にお金として届けるのではなく、何かの形でその想いをつなぐことはできないかと考え、まずは義援金を使って福島の子どもの支援から始めていく。その後、この取り組みを続けたいと「バナナ募金」という仕組みをつくり、日本全国の支援者から寄せてもらう募金でバナナを届け続けている。量としてはささやかであるが、ある保育園の園長先生から「福島を忘れずにいてくれる人たちが

いるというメッセージを運ぶバナナだ」と言われたことがある。バランゴンバナナの生産者が来日した際には、保育園を訪問してもらう機会も作ってきた。原発事故から7年。6月には二本松有機農業研究会のメンバーの畑にソーラーシェアリングのパネルが設置される。長い間望んだ一歩の始まりである。子どもたちの被ばくの影響も忘れてはならない。これからの被ばくの影響も忘れてはならない。これからの被ばくの影響も忘れてはならない。これからの被ばくの影響も忘れてはならない。これを発信していきたい。(吉澤)

福島からのメッセージ

福島から感謝をこめて

大内信一 / おおうち・しんいち
二本松有機農業研究会



二本松有機農業研究会の皆さん。右下が大内信一さん。APLAではにんじんジュースを販売中。

私の住む福島県中央部は2011年3月11日の大地震の被害は思ったより少なかったのですが、それに伴った原発事故による放射能汚染により、多くの作物が販売できなくなり、福島で安全な作物など生産できるはずがないという声私たちが苦しみ、提携していた消費者も60%が離れ、ここで今まで通り有機農業が続けられるのだからと悩んでいました。そんななか、全国から多くの励ましの声と、多くの先生や研究者が福島を訪れ、我々に力を与えてくれました。そんななかでAPLAの活動と出会ったのでした。東南アジアを主に農業支援をしていたのを、日本国内で苦しんでいる農家をも支援しようとして私たちと出会ったのでした。

福島をどうするのか、ただ目の前の問題だけを取り上げるのではなく、100年先を見据えた福島の復興を考えようとして「福島百年未来塾」を立ち上げ、一年余りにわたって、学びの場を作って多くの人たちと共に学んだのでした。原発後の農業技術、除染対策、放射能の対策とともに、世の中の動き、エネルギー対策など、多方面にわたる学びは、私はもちろん、福島にとって大きな歩み力となったのです。

私たちの課題である脱原発による自然再生可能エネルギーへの道では、先進国であるドイツの現場を見る機会を与えられました。また、APLAのアジアの活動拠点であるフィリピンの農村に行き、交流できたことも大きな喜びでありました。これらは、福島の苦しみを通じて与えられた愛の賜物。日本の脱原発を成し遂げ、世界平和の道に農を通じて少しでも貢献できる歩みをして、これまでの多くの愛に報いる道を歩みたい。春3月、東北でも雪が消え、今年の農の始めである野菜の種まきをしながら、次の聖書の言が心を潤します。

彼らは剣を打ち直して鋤とし 槍を打ち直して鎌とする
国は国に向かって剣を上げず もはや争いのことを学ばない。

APLAの皆さんとの出会い

高荒正子 / たかあら・まさこ
あすなる保育園園長



3.11東日本大震災後、私が受けたある会社のインタビューがネット上に流れ、それをご覧になったAPLAの方が支援として「バナナの提供」の連絡を下さいました。当時、食に関してとても敏感になっていて、大人と違い、子どもは放射線量の影響が懸念されるので、県外産・測定済みの物を使用することを希望する方が多くいました。安全の保障は出来ないが、安心できるように保護者に寄り添って対応していた時でした。

自園では、地産地消プラス国内産をモットーに食材を選んでいました。バナナの提供はしていませんでしたが、頂いた連絡に震災当時は緊急事態で、国外の物を使用することに決定し、厚かましくも提供を依頼しました。

おやつにバナナが出ると、保育園では初めてのことなので「え！バナナのおやつだあ」と驚きと喜びの声。バナナのパワーを話すと、お替わりして食べる程でした。

ある時、バナナを栽培しているフィリピンで大洪水があり被害があったことを話すと、バナナを提供して下さる方に心を寄せ、私たちが大変だった時に頂いた優しさをお返ししたいと、募金と千羽鶴を贈ることになりました。小さい子どもも自分たちが頂いた思いやり・優しさにはきちんと応えることができます。

その後、フィリピンの方が来園して下さり交流を持つことができました。スライドで、バナナ収穫の様子を見て質問し興味を持ち、また一緒にダンスも踊り、民族の違いに気づきました。その時頂いた絵は今も大切に飾ってあります。とても国際的になり、子どもたちが世界へ目を向ける契機となりました。

今もバナナ支援の継続があり、食する時に提供して下さる方に感謝、美味しさに感動、そしてこの出会いに感激しています。

アジアの農民同士の交流

3カ国若手農民交流 ネグロス／東ティモール／ラオス 〔2016〜2017年実施〕

ネグロス、東ティモールで地域づくりの活動を進めるなかで出会った若手農民と、ATJが取り扱うラオスの若手のコーヒー生産者が、各国を訪問し合い、単一栽培に頼らない循環型農業や作物多様性について学び合いました。各地域で活躍する若者の意欲の向上につながり、自主性が育つ交流となりました。

参加者の声
マルコス・ドス・サントス
／ Marcos Dos Santos
東ティモールのコーヒー生産者

APLAが実施したフィリピン、東ティモール、ラオスの交流に参加して、大きな成果を得ることができました。特に、単一の生産物(自分たちの場合はコーヒー)に頼りすぎず、収穫シーズン後にも生活を保障できるような多様な農業について、どうやって地域の農民たちの意識を変えていけるのか、フィリピンやラオスの仲間たちの考えや意見をたくさん聞けた



ネグロスのKC-RCで、手作りで砂糖を作ることに。砂糖キビを絞るマルコスさん(左)。

バナナ募金・園児たちとバナナ生産者の交流

あすなる保育園、 こどものいえそらまめ訪問 〔2014年10月〕

バナナ募金の取組みでは、福島県の保育園、幼稚園へバナナコンテナを届けることに加えて、フィリピンからバナナを生産者が来日した際には、バナナの届け先の園を訪問する機会を作ってきました。保育園を訪問した生産者からのメッセージです。

参加者の声
ロッドジム・カバレロ・カトウバイ
(愛称ボイ)／ Rodin Caballero Catubay
ネグロス東州バナナ生産者

私たちの訪問と交流を子どもたちはとても喜んでくれました。放射線の被ばくの問題で子どもたちが自由にどこでも遊べないという深刻な問題があることを知りました。そうしたなかで、親御さんたちも信頼して子どもたちを送り、日々面倒をみる先生たちの仕事ぶりに感銘を受けました。訪問先のひとつ、あすなる保育園は、2013年に発生したヨランダ台風の被害に際して、千羽鶴を送ってくれました。



フィリピンの童謡「カラバオ」を歌いながら踊るボイさん(右)。

それは、最終的には台風被害ではなく、2012年2月にネグロス東州で起きた地震で被災したマイフマイ小学校に届けられたのですが、そのお礼として小学生たちの作品を私が代表してあすなる保育園に手渡ししました。福島の保育園とネグロスの小学校との交流も継続していけたらよいと思います。

ことは、とてもよかったです。どの国でも大半の農民は、意識を変えるのが難しいということです。けれども交流プログラムを通じて、地域の農民に影響を与えられるようになるための自分たちの意識や能力が少しですが向上したと思います。一気に大勢とはいかず、一人、二人からですが、持続可能な農業に取り組み仲間を増やしていけると思っています。

交流

出会う、
気づいて、
つながって

APLAの活動の柱のひとつとして、多様な交流を進めてきました。
参加者の皆さんからコメントを寄せてもらいました。(敬称略)

若者の交流

グリーンコープ 青少年ネグロス体験ツアー

JCNCの時代から続いてきたグリーンコープ主催のツアー。日本の高校生とネグロスの若者が1週間にわたり共同生活を送り、ワークショップやゲームを通じて自分自身、お互いのことを学び合うツアーです。人生の宝となるような時間を過ごし、毎回別れの時は涙涙！日本とネグロスの連帯を築いてきている大事な交流です。

参加者の声
クレント・ウアレン・ネブリル
／ Clint Warren Nebriil
ネグロスの青年／2016、2017年参加

1週間という短い間にたくさんのゲームやワークショップから多くを学び、自分自身が解放され、それを友だちに共有することで普段抱えている不安を取り除かれました。新たな友だちとの出会い、新しい言葉を学ぶこと、異なった文化に触れること、お互いのことを語り合うのはとても楽しいです。このワークショップで自分自身を見つめ直し、これからの人生について考え、また今まで私にはなかった新しい世界を知ることができ、視野が広がりました。今後もこのワークショップが続き、これを通じてフィリピンと日本の絆がさらに強くなっていくことを願っています。私たちの連帯がそれを可能にしてくれると信じています！



一番左がクレントさん。ツアー参加者と一緒に。

日比若手農民交流

ネグロス視察ツアー 〔2013年2月〕

震災後、APLAとのつながりができた二本松有機農業研究会の若手2名がBMW技術協会主催の若手メンバーツアーに参加しました。ネグロスからは経済だけでは測れない豊かさを学ぶ一方、ネグロスへは福島原発事故の現状などを伝える機会となりました。日本・ネグロスの若者たちが一緒に学ぶ機会となりました。

参加者の声
大内 督／おうち・おさむ
二本松有機農業研究会代表

ネグロス島のKFIRCでは若者が家畜の飼育、野菜の栽培を学び、販売までおこない、農業者として



福島原発事故後の状況を話す大内さん(前方中央)。

消費者と生産者の交流

グリーンコープ組合員ツアー 〔2016年9月〕

グリーンコープでは2年に1回、組合員ツアーを実施し、APLAの活動のパートナーや民衆交易の生産者を訪問し、交流してきています。2016年には、民衆交易の一番新しい仲間であるカカオの生産地インドネシア・パプア州を訪問されました。

参加者の声
三原 幸子／みはら・ゆきこ
グリーンコープくおか理事

児童労働のないカカオで作ったチョコレートがほしいと言う組合員の声からパプア州との交流が始まりました。

パプアの森は豊かな恵みをたたえ、村人はその日食べる分だけ採ってきます。そこに突然来訪者があ

れば準備した食事を惜しみなく分け合って食べます。赤子は地域の女性たちに代わる代わる抱かれ、その子の顔は安らかです。お母さんも育児ストレスはないとのこと。日本で子どもたちが自殺する話をすると、どうして子どもが自殺なんかするんだと驚かれました。障がいのある方は皆が自然に助け合っていました。助け合い支えあう事が当たり前、グリーンコープが目指す「地域」がそこにはあります。

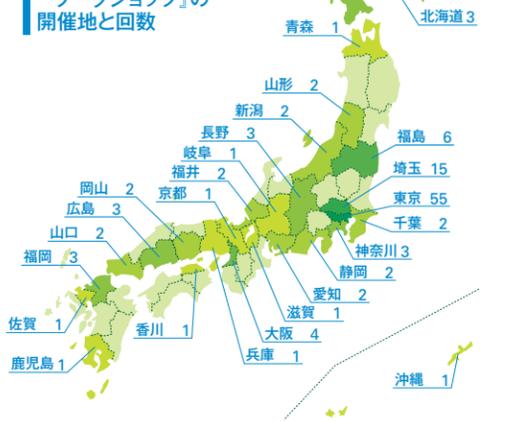


カカオの生産者と三原さん(真中)。

ホンモノの手作りチョコレート

パアの森の中で大切に育てられたカカオをどうしたら日本で広げていけるか、A T Jの商品担当者と一緒に頭を悩ませていた時に、きまぐれやの吉田友則シェフがくださったアドバースが、単に製品になったチョコレート販売するだけでなく、せっかくなにかあるカカオという素材からチョコレートにする行程を体験できる「本場の手づくり(ハニーからつくる)チョコレート」を企画するというアイデアでした。そして、ワークショップという形で、各地を周りはじめたのが2013年1月のこと。それから約5年間で、北は北海道から南は沖縄まで(小さなお子さんから大人まであわせて)2300人近くの方が参加してくれました。

現在までに開催した「ホンモノの手作りチョコレートワークショップ」の開催地と回数



COMMENT

吉田友則 / よしだ・ともり
きまぐれや、シェフ

ワークショップ・キャラバンで2013年から3年かけて全国あちこちに行きました。厳密に作ろうと思えば、いくらでも難しくなるチョコレート。あえてシンプルなレシピと「大人の泥んこ遊びだと思ってやりましょう!」の声掛けで始めると、どこかの会場も想像を超えるエネルギーと笑い声が待っていました。「カカオは熟成します。発酵食品です」。そんなことを言いながら、取り扱う側も時間をかけてこのカカオのことを知っていくのだと、たくさんの方を教える機会がありました。遠くパプアから届く作り手の温度感を皆さんに届け、皆さんの感じた温度感を向こうへ届けるのがこのワークショップとキットの役割かなと思っています(ハリーナ31号APLA食堂より抜粋)。

ワークショップ主催者から
榎本 淳 / えのもと・じゅん
新潟県長岡市

新潟県長岡市を中心に「幸せのチョコレートづくり」の名称でチョコレートワークショップを定期的開催しています。あえて「フェアトレード」の言葉を使わず、これまで接点のなかった方ともチョコレートを通じて海外とのつながりを考える機会をつくっています。地域にあるものを掛け合わせ、大人も子どもも楽しめる時間になるように、これからも活動を続けていきます。



吉田シェフ(後列左から2番目)とAPLA認定の「カカオ大使」となられた皆さん(2016年12月)

民衆交易品を見て触って味わえる キッチンカー「Prop cafe」

あれは遡ること4年前...のいつかの理事会後の飲み会のこと。

理事の市橋さんからカフェ車の構想を聞いたのがその始まりでした。それまでイベント出店といえは基本物販だけで、コーヒーなどを実際に飲んで味を知ってもらいたいという気持ちが高まっていた事務局にとっては、夢のような話でした。皆目が輝いて、とてもワクワクしたことを今でも覚えています。そうして、あれよあれよという間に準備が進み「名前は何がいいかなあ?」Prop cafeがいいんじゃないか? という具合で、気合を入れてお店の名前の入ったのぼりを作り、20

14年11月23日にオープンしました。最初は不慣れなことも多く毎回の練習(といったらお客様に失礼ですが)のようでもありましたが、「生産者とながっているコーヒーのおいしさをたくさんの人に届けたい」という気持ちとインターの学生たちのお陰でどんどんパワーアップしています。ほんの一部ですが、カフェの様子をご紹介します。



最近のカフェ車。これからも更に進化していきます!



●開店したてのカフェ。まだまだ手探り状態。



●学生インターンが作った看板。カフェにはとっても重要なアイテムです。



●市橋さん(写真内)の自家焙煎コーヒーは注文を受けてからその場で挽いて、ハンドドリップで丁寧に淹れています!



●カカオキタのデッキーさんも遊びに来てくれました。インターンの2人と一緒に。大島さん(左)、小川さん(真中)。

●マスコバド糖30周年を祝したドリンク。ジンジャー(写真内)と黒糖ミルクコーヒー。

※東京朝一アースデイマーケットに出店中! 詳しくはこちらをご覧ください。

<http://www.earthdaymarket.com/>

※東京一円での出店許可を持っているので、イベント開催のお誘いも大歓迎です! APLA事務局までご連絡ください。

2016、2017年度開催 「友産友消のススメ」

友だちが手塩にかけて作ったものをいねいに料理していただく。「〇〇県産の～」もいいけれど、「〇〇さんのこ

だわりがつまった～」を食卓に増やしていきたい。そうすれば、日々の食卓は、美味しく楽しく豊かに変わっていくはず……。そんな「友産友消」を広げたいという思いのもと、6名のとびきりの料理人に腕ふるっていただいて「友産友消のススメ」を開催しました。

エコシュリンプ

Ecoshrimp
鈴木 裕 / すずき・ひろし
エヌ・ハーベスト



- ケララ風エビカレー
- スッキーニとアスパラのサンバル
- じゃがいもとほうれん草のクートウ
- ココナッツライス
- ファンザアブリコットのライタ

COMMENT

エコシュリンプを惜しみなく使っていただいたケララ風エビカレーをメインにした本格南インド料理のプレートをいただきました。スパイスの専門家・鈴木さんならではのスパイス使い。その虜になってごはんのおかわりをする方が続出でした。エコシュリンプは最後に加え、火を通しすぎないのがポイントに仕上げるコツだそうです。

バラゴンバナナ

Blangon Banana
Samosa wala Timoke



- 青バナナのセネガル風煮込み(煮)
- 青バナナのココナッツマッシュ(蒸)
- 青バナナと甘長とうがらしのグリル ライタソース(焼)
- 青バナナチップスとブルーベリードレッシングのグリーンサラダ(揚)
- 紫キャベツとコリンキーのクミンマリネ
- 丸麦入り玄米ごはん
- 完熟バナナとココナッツとカカオニブのスイーツサモサ

COMMENT

バラゴンバナナをメインにした料理、というのは一番の難題だったかもしれません。熟していない青バナナを使ってきれいなプレートを提供してくれたTimokeさん。調理法を変えることで、異なる食感や味を存分に楽しませていただきました。

パレスチナのオリーブオイル

Palestinian Olive Oil
新納平太 / にいる・へいた
PEACE DELI



- 季節の果物とグリーンのパレスチナオリーブオイルのサラダ
- 青バナナのココナッツマッシュ(蒸)
- 子どもパンのバゲットとパレスチナオリーブ&キャロットの自家製パテのカナッペ
- パレスチナオリーブと鹿肉の自家製パテドカンパーニュ
- キヌアとヘンプナッツとチアシードのオリーブオイルマリネ
- エコシュリンプとオリーブのトマトパスタ
- スタンプタウンコーヒー ホンジュラス

COMMENT

パレスチナのオリーブオイルは、火を通さず生のままで香りや風味を楽しむのがおススメということで、ドレッシングやパテ、マリネにふんだんに使っていただきました。パンや鹿肉、雑穀など、新納さんの「友産」の素材との美味しいコラボが実現したディナーとなりました。

ゲランドの塩

Sel de Guérande
按田優子 / あんだ・ゆうこ
東京くらげ



- うま味を引き立てる: 根菜の塩きんぴら
- 酸っぱくてしょっぱい: レモンと塩味の貝
- 腐敗でなくて発酵に導く: 大根と洋なしの漬物
- 甘さを引き立てる: 男前ほうろ、バラゴンバナナタルト
- 塩分にはカリウム: お芋3種、果物盛り合わせ

COMMENT

メニュー名にある通り、塩が持つ多様な役割の一つひとつのお料理を見せてくださった按田さん。「レモンと塩味の貝」は、具材のムール貝よりもソースがメインと言っても過言ではないくらい、酸っぱくてしょっぱいソースと一緒にお芋がどんどん進みました。ゲランドの塩ならではの旨味のある塩気の魅力、再発見! な夜でした。

パプアのカカオ

Cacao from Papua
吉田友則 / よしだ・ともり
きまぐれや



- カカオをつかったパテ
- 2種のドレッシングで楽しむサラダ(パレスチナの無濾過オリーブオイル/カカオニブ)
- エコシュリンプのピスク
- こぼろとベーコンのカカオ和え
- 三里塚ワンパックの大根のコンフィ
- エコシュリンプのカカオパスタ
- チーズケーキ

COMMENT

民衆交易の食材すべてを使い切った特別ディナーとなりました。その中でも、驚いたのがカカオのバスタ! 主張しすぎないのにカカオの味がして、エコシュリンプベースのバスタソースにも不思議とマッチする、吉田シェフ・マジックのかかった一皿でした。

マスコバド糖

Mascobado Sugar
吉田友則 / よしだ・ともり
きまぐれや



- マスコバド糖がキャラメリゼされたトマトとエコシュリンプ
- マスコバド糖ジンジャーレッシングサラダ
- トマトソースのバスタにマスコバド糖を加えながら
- 豚肉マスコバド糖煮込み
- シェフのお母様お手製寒天とマスコバドジンジャーシロップ添え
- コーヒーとマスコバド糖パウンドケーキ

COMMENT

マスコバド糖の様々な側面を味わう実験的なディナーとなりました。写真は、一見普通のトマトソースバスタに見えますが、このトマトソースは、トマト缶そのままをバスタに乗せただけ。その上からマスコバド糖を振り掛けると、あら不思議、コクのあるトマトソースに変身。「天然旨味調味料」であるマスコバド糖の特徴を実感できる一品です。

安藤 ○まずは、この10年間それぞれが関わってきた具体的な仕事や活動について話してもらい、その中から見えてくる社会状況や達成できたこと、課題などを議論していきたい。

箕曲 ○フェアトレードをテーマに、ラオスのコーヒー生産者のところに大学生を連れて行くツアーを2011年からやっている。ツアーを始めた直接的な理由は、フェアトレードに関心のある学生はいるが、現場のことを分かかっておらず、とんちんかんことを言っていることが多いと感じたから。学生たちは「フェアトレードを広めたい」と学内外で活動しているが、話を聞いてみるとちよっとおかしいぞ、と。大学の教室の中で

植民地主義や南北問題の話をして、学生たちは自分とはまったく関係がない話だと思っていて関心を持ってもらえない。話す方は非常にむなしく、聞いている側も退屈。それを解決する一つの手段として、現場に実際に行くということが必要ではないかと考えてスタートした。発展途上国のコーヒー生産者のひとつの事例を実際に見に行くことで、なぜ彼らがこういう生活をしているのか、その歴史的理由まで考えてもらえたらいいなと思った。目標とした「相手に対する共感」や「交流するお互いが感動する」出合いの場は確かに

があるのではないか。Popカフェは渋谷の代々木公園で開催されているアースデイマーケットでの出店が主だが、APLAが別の場所で行ったイベントの消費者の反応とかはあるか？

吉澤 ○先日、新宿駅西口のターミナル広場で開催された新宿区の消費生活展へ出展したとき、1本80円でバナナを売ったが、1房80円だと思って会計した人に400円だと伝えたら無言で返されたり、「どんだけおいしいバナナなのかしらね」と嫌味を言う人がいたり、こういう消費者が一般的なんだろうな、と改めて気づいた。一方でアースデイマーケットでは、どんなに見てくれが悪くても買っていくお客さんはいるので、価値の二層化が如実に消費行動に表れるなと。こういう世の中に生きているのが体験として分かる。

時代が変わるなかで 試行錯誤した10年

吉澤 ○2008年にAPLAとなつた時、JCN Cから引き継ぐという立場で意識してきた点がある。ひとつは、支援でなくて分かち合いの関係性をどうつくれるかという点。活動にはどうしてもお金が発生するのでそれをアジア側に持つていくことはせざるを得ないが、向こうのパートナーと何かを進めるときに、その取り扱い方に注意

生み出せてきた。まったく違う世界に住んでいる人たちが出会うことで感じる点があり、様々なバックグラウンドを持つ参加者が何かしらを感じて持ち帰っていく。そして、日本で自分が飲むコーヒーに愛着を持つようになつている。ただし、課題として残るのは、大きな話には結びつかないということ。共感や感動はあるが、その場で終わって、なぜ彼らがそういう生活をしているかという点まで思いがいきつかない。

安藤 ○フェアトレードに関心がある学生が「とんちんかん」というのはどういうことか。

箕曲 ○フェアトレードは一般的に市場価格より高いお金を渡してい

座談会 Round-table discussion

この10年を振り返って

APLA理事、評議員5人が、APLAに関わってきたことを放談しました。社会のあり方と価値観が大きく変わろうとしているなか、APLAの活動をどう捉え直すのか、何に力点を置いていくのか、意見を交わしました。

るので、これを買えば生産者の貧困を解決する、と学生たちは説明する。そのこと自体は間違いではないが、その生産者の生活について全くイメージできていない。ご飯も食べられずとてもひどくしているような状況の貧困をイメージしている。実際に飢餓状態の人たちは世の中に多くいるが、フェアトレードが対象にしているのはその層ではない。ラオスのコーヒー生産者の場合は、お金はないけれどもまったく飯が食えないわけではなく、医療や教育で足りないところはあっても、彼らなりに考えて楽しく生活している。その人間の部分が見えていない。

安藤 ○植民地主義を話すのが難し

聞き手
安藤文将 / あんどう・たけまさ
APLA評議員、武蔵大学教員

座談会参加者
赤松結希 / あかまつ・ゆき
APLA評議員、ATJ事業部商品一課
バラコンバナナ担当

市橋秀夫 / いちはし・ひでお
APLA理事、埼玉大学教員
APLAではPtoPカフェ担当 2009.11.14年にバラコンバナナ生産者の現地調査実施

箕曲在弘 / みのお・ありひろ
APLA理事、東洋大学教員
ATJラオスコヒー事業相談役

を払った。それは東ティモールで特に体現してきたと思う。JCN Cの失敗から、お金やモノ、プロジェクト、様々なノウハウを外から持ち込むことによる難しさが引き継がれていたので、向こうの主体性をどう引き出せるかを留意してきた。東ティモールで具体的な活動を始める前に、パートナーとなる地域を探る際、野川が長期間ホームステイをした。外国人が入った時に、援助がもらえるとかお金をもらえるんだという対応をしない地域を選んだのが大きなポイント。お金を渡すのではなく、情報を提供したり、誰かとつながったり、みんながやりたいことに寄り添うパートナーでありたいと予め説明した。このことで、大きな支援は期待されず、ただ現地を頻りに訪問し寄り添うことで、向こうの人間がやりたいことを実現してきた。最近では、一緒に活動してきた農民たち自身から、地域の中で活動できる組織をつくりたいと

いう話が主体的にできている。JCN C時代の失敗を含めた経験を踏まえてアプローチしたからこそではないか。だからこそ、今後も適切な寄り添い方ができれば、10年くらいで東ティモールの人たちが実現できるものではないかと思う。

ふたつめは、APLAの設立趣意書にも書かれていた、農村と都市の格差と、その問題に向き合っていくつなされるかという課題。APLA初期は、千葉県成田や島根県弥栄や北海道中標津などへの国内ツアーも開催し、農業、林業、酪農など日本の現場を見て歩き、その地域とつながれないかと画策したが、単発で終わってしまった。その頃に3・11が起きて、その後福島の二本松有機農業研究会と出会い、継続的な関係性で活動を共にしていくことになったが、もはや農村と都市という枠組みではなかった。

また、2008年頃に反貧困ネットワークの活動が始まり、国内の貧困問題が可視化されてきた。あの時、反貧困のイベントでフェアトレードの話をしてほしいと頼まれたのだが、そこで私は一体何を話せばいいのか大きな問いを突きつけられた。その後APLAの活動をするなかで、その個人

くなっているという点については？ フェアトレードと植民地主義は深く関わっているはず。

箕曲 ○抽象的な話をリアリティをもって聞いているのか、学生たちがどう受け取っているのか、正直わからないところはある。ひとつ言えるのは、世界史を勉強している人が減っていて、基礎となる事実を知らない。統計的なデータはないので肌感覚だが、現代史の部分の授業時間が短くなっているとは言われている。関心がなく言葉を知らなければ、まったく頭に入っていない。また、「権力」を理解するのが非常に難しいようだ。権力は目に見えない。力を持っている人がいて、それに従う人がいて…というのはどこでも存在する構造だが、そこへの感受性がない。そう言われてもどこが問題なのか分からない。その辺りも、植民地主義を理解するための前提だと思っただけ…。

大きな話と「人間の部分」

市橋 ○自分の問題関心は箕曲さんが話したことと重なっている。「人間の部分を捉えきれていない」という点だが、ATJやAPLAのこれまでの運動にあると思う。植民地主義という大きな部分にのみ位置付けた議論を脱却しようとしてきたが、やはり、運動家たちの運動という部分が強

的な体験がいつも頭の片隅にあった。南北問題やアジアの貧困と言いつつ、村でも都市でも日本の中で生きていくのが苦しい人もたくさんいるなかで、民衆交易とかフェアトレードとは何だろうと考え続けている。イベントをきっかけに出会ったあるグループの人たちが、自分たちで茨城でお米や野菜を作っているという話を聞いて、お金で売り買いするだけではない何かを創っていくことで乗り越えられるのでは、と意識してきた。具体的な活動にはできていないが、そういうことも試行錯誤した10年だった。

安藤 ○農村と都市の関係性の点でもう少し聞きたいが、3・11が起きて、二本松との関係が生まれてきたが、この点をどう位置付けている？

吉澤 ○村か都市ではなく、原発事故は福島だけの問題ではない。自分たちも当事者として関わり、何ができるのか。福島の人たちを助けるというのではなく、これからの地域をどう創れるか、あり方をどう模索していくのか。それを一緒にできるパートナーとして二本松有機農業研究会の歩みに寄り添わせてもらい関係性を築いてきている。出会った頃、二本松有機農業研究会の大内信一さんに「俺らもフィリピンと同じになっただか」と言われて、国際協力をし

く、バナナの生産者の話、人間の部分、生活の部分への理解がどうなのかという違和感がずっとある。Popカフェも実は同じで、日本の消費者との直接的な接点をもつて作りたいというのがあって始めた。自分個人の直接的なきっかけは、震災後、大学教員の仕事がないこと、という疑問。祖父母が戦前から街の角屋さんをやっていた。子どもの頃には自分も店の手伝いをしてた。色んな人がきて、かからかわれたり、ほめてもらえたりして楽しかった。そういうこともあってPopカフェを始めてみた。バナナ生産者になったら、学校に子どもをやりたいからバナナの値段をあげてほしいとか色んな事情がある。等身大で見て聞く必要がある。世界を変えるためにバナナを作っているとかとは違う次元を理解して伝えていく必要があるように思う。だから、だんだん大きな話から離れて、事故で指を亡くしたトラックの運転手はどうしているかな、フィールドワーカーがお金使いこんで首になった彼はどうしているかな、一人でバナナ育てていたおばあちゃんもだいたい歳だろうしどうしているかな、と意識がそっちに行ってしまう。

安藤 ○市橋さんにとってPopカフェの活動には、物を売ったり買ったりする原点に帰るという意味

ているNGOが二本松に行くことで。そういう対象なんだという思いを抱かせてしまった。「そうじゃない」ということを見せたい必要があった。それには何かを一緒にやることで乗り越え、APLAの思いを丁寧に伝えていく必要があった。

安藤 ○フィリピンの1980年代の飢餓に象徴される政治・社会問題の構造と同じものが、今日の日本社会の中にもある。都市はその問題から無縁ではなく、むしろその問題が集約的に現れる場である。**吉澤** ○APLA設立時からかなり長い間ウェブサイト「農村と都市」ということを載せていたが、かなり早い段階でこの捉え方は変わっていったのではないかと今と比べては思う。国際協力関係で一番大きなイベントであるグローバルフェスタにも2012年から出なくなり、逆に国内の横のつながりをつくれるアースデイマーケットのようなものになるようになった。事務局では、自分たちのアイデンティティをそうやって位置付け、南北問題の構造やグローバル化の問題は別のものじゃないという意識で動いていったように思う。

箕曲 ○まさにAPLAらしいなと思う。それともう南北問題という構図から出ましようよ、という話。そういう枠組みでものを捉えている限り、自分たちがやろうと

していることは達成できないという
う気づきだつたのではないか。

赤松 ○ そういう流れの源流はJCN
C時代からあった。「足元から
考える農・食・国際協力」の発行
だったり、RUAというむらとま
ちをつなぐNGOもつくって一緒
にやっていた。グローバルフェス
タでも日本の野菜でつくったジュ
ースなどを作ったりして「何でそ
ういうことしてるの？」と異色の
団体として見られていた。JCN
C時代から日本の農村ともつな
がりたいという思いがあったが、
PLAとして仕切り直し、出直し
たのは大きかった。今までの流れ
をくみながらも、パートナーとし
てアジアとつながるといふ大きな
きっかけになった。

バナナを通して見えてくる 昔と今

赤松 ○ この10年ATJでバナナを
担当してきた。ATJは株式会社
なので、マスコパド糖やバナナを
きちんと日本に持ってきて販売す
ることが役割として一番求められ
ている。いかに事業として成り立
たせるか。ただ、その原点には、
ネグロスの飢餓があり、人びとが
きちんと生活できるようにするた
めの砂糖やバナナでもある。主な
販売先は生協だが、昔から知って
いる組合員さんには「この30年
何が変わったの？」とよく聞かれ

る。初期の頃に目標としていた、
1日三食食べられるなど、生きる
ために必要最低限のことはできる
ようになった。ただ生産者の生活
が劇的に変わったわけではないし、
民衆交易はそれだけをめざすもの
でもない。でも買いつけている消
費者には、生産者の生活の変化に
寄り添っているから高くても買いつ
けているという方もいれば、安全
なバナナだから買っている、とい
う人もいる。鶴見良行さんの『バ
ナナと日本人』が出るまでは、バ
ナナに農薬が大量に使われている
ことは知られていなかった。バラ
ンゴンの民衆交易が始まったとき
は、安全というだけでなく他のバ
ナナとは違った。今は安全という点
で見れば、世の中に選択肢が増え、
スーパーでも有機のバナナが買え
るようになった。有機認証をとつ
ているバナナの方が安全性という
面では一般的には分かりやすい。

安藤 ○ 消費者に対して、価格や安
全性の観点だけではなくどうやっ
て訴えていくのか。

赤松 ○ オルタナティブが増えてき
た今、バランゴンは何が違うのか
を伝えるのが難しい。小規模生産
者の生活が見えているのかという
市橋さんからの問いについても、
見えていないわけではないが、どう
うまく伝えたらよいか苦労して
いる。箕曲さんの学生ツアーの話
でも、学生が体験、共感するとい

う点が出てきたが、本当はATJ
にいる私たちも生産者と消費者を
つなぐ役割をしなくてはならない
が、事業を回すのに精一杯でそこ
までできていないという現実があ
る。

新宿の消費生活展でバナナが高
いと言われたエピソードが出てき
たが、これが今の現実なんだと思
う。生協の中でもある程度二層化
してきている。信念を持って買
支えるという層と、安心安全なも
のが配達してもらえて便利だから
買うという層。そういう現状で生
産者のことまでしっかり伝えるの
は難しさがあり、自分たちに欠け
ている点だと痛感している。かつ
フリーピンの経済成長で物価や物
流費も上がっているが、どんな
値上げするわけにはいかない。A
TJの事業全体の中でも何かの転
換が必要になってくる。ますます
いいのは分かっているけど高く
て買えないバナナになっていか
ないようにするにはどうしたら
いか。

市橋 ○ 新宿のお客さんの話があつ
たが、その人たちを必ずしも全部
味方につける必要はないと思う。
昔は熱心な人たちとの付き合いが
濃かっただけで、そんなに悲観す
ることはないのでは。ただ、一方
でグリーンコンシューマリズムな
ど、我々以上に企業がまるで生産
者に近いような見せ方をするよう

になった。その影響はあるかも。
赤松 ○ 一般の組合員まで届けるに
は分かりやすい情報を伝えないと
いけない。

吉澤 ○ 分かりやすい情報を出す
いうことについてはAPLAでも
課題としてある。ただ、分かりや
すくすると情報が単純化され、そ
こで思考停止してしまう。現場は
複雑だし、色んな難しさがあるが、
スピードが速くてすぐに情報がほ
しい社会でどれだけそうした情報
が必要とされているのか。

箕曲 ○ それは段階を分けるべき。
ある層には分かりやすい情報、別
の層にはもっと深い情報を。大学
の授業でも、一般教養では分かり
やすく伝え、ゼミレベルでは深く
学ぶというのとイメージが重な
つた。

市橋 ○ 自分としては、向こうの生
産者も運動家ではなく、普通に生
活して四苦八苦している人なんだ
というのをベースにしてほしい。
例えばPCでカフェで売るときも
東ティモールとラオスは現地に行
って毎年確認している、自分たち
が直接つながっているんだと、味
の点だけではなくそう伝えている。
村と都市という図式もあまりリア
リティがなく、どちらも四苦八苦
していることを伝えたい。大きい
企業が第三者認証でポンとやるの
と差別化は難しいけど、自分の生
まれの原点もあるが、小さい自営

のお店がどんどん無くなっていく
社会は悲しい。

私たちのアプローチとは？

安藤 ○ 南北問題がフェアトレード
であり、JCN Cの原点だと思
うが、APLAもそこを引き継いで
いる。南の貧困がなくなったわけ
ではないが、南北問題を巡る状況
が変わってきている。

箕曲 ○ 「北が豊かで南が貧しい」
という固定観念でとらえるべきで
はない。国内と海外の貧困問題は
つながっている。貧困の定義をど
うするかにもよるが、見方によつ
ては、私たちもすでに貧しいと捉
えられるし、貧困の概念そのもの
も変わってきている。ふと思った
のが、ラオスに学生を連れていく
ことによって、自分たちの生き方
を見直すのが重要なテーマになつ
ている。そう考えると、学生たち
の関心が大きな問題にいかない
と言ったが、そこにいく必要もな
いのかも。自分たちの生き方を考
えられれば、それでいいのではない
かと。今年ツアーに参加したある
学生が「農業ってすごい」と言つ
た。ノンカリ村のストーンさん
というやり手で力のある農家がい
る。彼が自分の土地を活用して何
を作るかを考えて、お金を稼いで
いる姿を見て、非常に主体的な人
たちだと理解する。それが自分の
生き方、考え方を変えることにつ

ながる。自分の生きていく今の日
本社会が非常に制度化されていて、
実は自分の選択肢が少ないことを
言語化できなくとも感覚として持
っている。それは学生を観察して
いると見えてくる。学生の大部分
が卒業して就職したら一生そのま
まで、会社に行ったら社畜となり、
そんな人生しか選べないと思つて
いる。そこを変えるのがラオスの
農家に会いに行く意味の一つだろ
う。ある意味では、貧困・貧しさ
というのは選択肢がないことと捉
えると、今の日本の学生は貧しい
人生を歩んでいるのではないか。

安藤 ○ 数百年の植民地主義と資本
主義で構築されたものを根本的に

解決することはAPLAだけでは
無理。だから、これらの問題に対
して自分たちなりにどうアプロ
チするのが問われるのではない
か。例えば、箕曲さんのアプロ
チは、学生を現地へ連れていき学
生を触発すること。他の皆さんに
とってはどうか。

市橋 ○ 達成できていない課題では
あるが、それぞれの声を聴いて、
それをうまく伝えること。以前バ
ナナの生産者を撮った15分程度の
ビデオがあつたが、そういう形が
必要だと思う。生産者と消費者を
より直接的につなぐということ。
南北問題の中でもその関係が切り
離されているわけだから。あと個
人的には、歴史のオーラ
ルヒストリーに関心があ
るので、何で30年間バ
ナナを買ってきたのか、消
費者側のことを記録して
伝えるようなことをやり
たい。

吉澤 ○ 会員やサポーター
たちから応援メッセージ
を集めたが(24,25頁)、A
PLAに関わることで、
人生が変わったとか、モ
ノのとらえ方が変わった
というコメントが多かつ
た。その人の生き方にリ
アルに触れられるような
ものといかにつなげてい
けるかが私たちの仕事か

学生たちとラオスのコーヒー生産者を訪ねる。



なと思う。ただ学生がラオスへ行
くように、全員が現地に行けるわ
けではないので、様々な活動やツ
ールでどうきつかけを作れるかだ
と思う。

箕曲 ○ ATJの場合は、バナナや
エビを輸入すること自体が南北問
題に対するアプローチで、それは
ずっと変わっていないと思うが、
果たしてそれだけでいいのか？
ただ、難しいのは、ATJは、本
来「モノからコトへ、コトからモ
ノへ」なんだけど、モノに規定さ
れる仕事をしているから実務的な
作業から離れることができない構
造になっているように見える。

市橋 ○ 「人の顔が見える」という
点では、社員がモノを扱うことの
困難さをきちんと伝える。例えば
バナナが余っているとか、台風で
バナナが倒れて今週は欠品だとか
廃棄が多くて困っているとか、ス
タッフはスタッフの切実さをちゃ
んと出したらいいと思う。ATJ
の人たちはおとなしい人が多くて、
自分たちのやっていることを伝え
たい！というのがあまり感じられ
ない。むしろ控えめ。

赤松 ○ 「人」という点では、産地
のリアルな姿を伝えるという点も
あるが、スタッフも一人の人とし
て働いているというのには確かに表
現できていない。組織の人間とし
てどう動くべきかを意識せざるを
得なくなっている。

安藤 ○ それも広く貧しさの問題の
一環ではないか。商品の流通の間
で関わる人たちが、モノを右から
左に流すという形で働かざるを得
なくなっている。本来人間は一人
ひとりユニークな存在だが、資本
主義の組織の中では賃労働者にな
ってしまう。それを減らしていく
という点もあるかもしれない。

市橋 ○ APLAにしても、やって
いることがよくわからないと言わ
れる理由のひとつは、誰がやって
いるのかが分からないというのが
ある。

箕曲 ○ ふと思ったけど、映画つく
りましようよ。需要と供給はそん
な簡単に一点にならないから、採
れすぎたときどうすんだ！とか、
社員が困っている様子とか出すべ
きだと思ふ。だから新宿のイベン
トで「なんでこんな高いんだ」と
言われても、そんな簡単に安く買
えるわけないんだぞ、というのは
携わってみたいと分からない。

市橋 ○ ATJが他と違うのはそう
いうところだと思ふ。

安藤 ○ 生産者が一番大変な人だか
らという継続があると、自分たち
が抱えている苦悩は言いづらいの
だろうか。

ているし、今はスタッフの苦悩と
かを出した方が、共感を得られる
のかもかもしれない。

安藤 ○ 民衆交易の現場で働いて
いる人も一人の人間で、資本主義
植民地主義に巻き込まれていて、
株式会社と社会的企業の狭間に立
たされている。もっと自由に語つ
ていった方がいいのではないか。

箕曲 ○ 映像でも演劇でも共感
は余白の部分から生まれる。効率的
に進んでいるときに感動は生まれな
い。困っているシーンの積み重ね
の方が大事。映像で表現すること
によって、意味のある伝え方にな
ると思う。スタッフのことだけで
はなく、生産者から全部撮ってい
く。結局私たちは資本主義の論理
のなかで右往左往する人たちなん
ですよ、生産者も我々も。

赤松 ○ 美しいストーリーばかりは
よくないよねという意識はあるが、
外からもそういう風に見えている
のだな、ということが改めて確認
できた。

安藤 ○ APLAやATJが南北問
題から始まったので、その視点
から話してもらったが、箕曲さん
の言葉を借りて言うなら、資本主
義で右往左往させられる私たちと
いうのは、南も北も変わらない。
そこを出発点にながら、立場や
境界を超えてどうつながっていけ
るのかは、これからも変わらぬ課
題であり続けるだろう。■

多岐にわたるAPL Aの活動。他のページで盛り込めなかったことや、事務局メンバーが選んだ記憶に残る活動や人物をピックアップしました。

村井先生が つないでくれた パプア

立時からAPL A共同代表を務められた村井吉敬さん（私にとっては恩師の「村井先生」です）がAPL Aの設立記念シンポジウムで話されたことを、10周年の節目を迎えるにあたって思い返します。「かつて東南アジアには独自のネットワークがありました。そしてそれぞれの地域の豊かさがありました。それが植民地化によって壊され、



村井先生、パプアにて。

グローバル化で壊された。日本の中でもグローバル化しながら格差社会へと突入しています。（中略）フィリピン、ネグロス、東ティモール、他にも拡がりを作り出しながら、楽しい未来を描けるAPL Aになってほしいと願っています。」

その村井先生がつないでくれたのがパプアのデッキーさんや現地事業体カカオキタのみんな、そしてカカオ産地の村の人

びとです。デッキーさんがいつも口に入っている「カカオの民衆交易を通じてパプアのカカオ生産者と日本のチョコレート消費者が共に学び合う」きっかけをつくってくれたのは、生前20年以上にわたってパプアに通い続け、国境を越えた友情関係を築いてこられた村井先生でした。そのパプアの森で収穫、加工されたカカオが初めて日本に届き、チョコレートになったのは2012年初頭のこと。あれから6年、APL Aではチョコレートの販売以外に、全国各地でパプアのカカオからチョコレートを手づくりするワークショップを展開したり、カカオの魅力やパプアの実産者のことを伝える絵本を発刊したり、「楽しく」活動を深化させてきています。村井先生、ありがとう！（野川）

台風ヨランダ襲来 緊急支援の難しさを実感

2 013年11月、史上最大級の台風ヨランダがフィリピンを通過。日本でもテレビに映し出された津波のような被災状況を見て胸を痛めた人が多かったでしょう。APL Aにもかつてないほどの支援金が届き、その総額は4341万9596円となりました。

その支援金をどこを通じて誰に届けるか。まずはバランゴンバナナ・マスコパド糖の出荷団体であるオルター・トレード社（ATC）による支援活動に半額を、もう半額は、KFRRC代表であったアンボさんを介してつながった、現地の教会グループやNGOたちと連携したネットワークであるAS



台風被災者の家屋再建を支援しました。

INを通じての支援を決定しました。ASINのメンバーたちは、海外から来る様々な支援が地元自治体の懐に収まったり、箱物で終わってしまったら、本当に支援を必要としている貧しい人びとへ届かないことを憂慮し、きめ細やかに支援内容を選んでいきました。家屋再建を支援したくとも、行政による再定住地が確定せずに実行に移せないこともありました。また、ASINはネットワーク組織のため、支援が長引くなかで意思決定のあり方が徐々に不透明になり、結局はすべての支援金を使い切れないという結果となってしまいました。メンバー団体がそれぞれ人材や資源を持出して活動していることもあり、最終的に残った支援金は日本へ戻すことに理事会で決定。今後「フィリピンで発生しうる自然災害」への緊急災害支援金としてAPL Aが管理することになりました。

パレスチナへの連帯

2 014年7月〜8月にかけてのイスラエルによるパレスチナ・ガザ地区への軍事攻撃では、東京23区の3分の2ほどの土地に6万発以上の銃弾が降り注ぎ、1500人以上の市民の命が無差別に奪われました。APL Aはパレスチナでは活動をしていませんが、パレスチナの西岸地域の農民が作ったオリブオイルを販売しています。その輸入を担うATJとも

に、軍事攻撃の被害者となったガザの人びとへの緊急支援のための募金を呼びかけ、集まった支援金は、オリブオイル出荷団体のパレスチナ農業復興委員会（PARC）とパレスチナ農業開発センター（UAWC）を通じて、食料品、水、医療品などとしてガザの人びとに届けられました。2008年末から3週間の軍事侵襲の際にも、同様の緊急支援を実施。こうした緊急救援だけでなく、パレスチナで活

動する他団体と共同で駐日イスラエル大使館に対する抗議・要請を出したり、日本の市民社会に連帯を呼びかけるための集会やキャンドル・ウォークなどの開催もしました。軍事攻撃以外にも、イスラエル政府によって続けられている「行政拘禁」の問題についても、ATJや生協団体と共に行政拘禁者の即時釈放を求める嘆願書を何度も出しています。特にUAWCの事

務局長であり、ジャーナリストとしても活動しているアブドゥル・ラザック・ファラージさんは、人生のうち16年以上をイスラエルの刑務所で過ごしています。今後もしオリブオイルの消費者として、国際社会の一員として、パレスチナの人びとの基本的な人権が侵害されている状況に対して声をあげてきています。（野川）

3カ国若手農民交流 学び合いが生み出す農家の未来

A P L Aのロゴマークの愛称は「ポコポコ」。これはサンゴ礁の満潮をイメージしています。潮が満ちていくにつれて、サンゴ礁のあちこちで「ポコ（水たまり）」ができ、ポコ同士がつながり始め、いつしか大きな海となっていくAPL Aの活動のイメージです。



ラオスでの交流。

2016年、2017年にフィリピン、東ティモール、ラオスの3カ国の次世代の農民たちがお互いの地域を行き来し、計4回の交

流プログラムを開催。お互いの経験や取り組みを学び合いました。日本（APL A）の私たちはあくまでつなぎ役で主役は各国の若手農民たちです。交流を重ね、互いの状況、素性を理解していくうちに、ヨソから来た農民との交流から友達仲間との交流に変化していきま

た。小さなポコとポコがつながったようです。交流の経験が自信につながり、参加者全員が学んだことを自分なりに工夫して実践をしてみ、それを家族や地域の農民に伝えていたり、ラオスの参加者は今後タイの農園に研修へ行くことを計画していたりと、新しいポコも生まれてきそうです。私たち日本側スタッフも、人が出会って、関係性を作っていく「交流」の力を改めて実感する機会になりました。これからもつながりを大切に「ポコ」と寄り添いながら取り組んでいきます。みなさんも一つのポコですよ。（寺田）

他団体とのコラボレーション

本松有機農業研究会のソーラーシェアリングのためのパネル設置を応援するために販売を続け、パネルサポーターの応援も共に実施しています。アユスはお坊さんたちが国際協力NGOを応援「JINNET」はイラク戦争で使用された劣化ウラン弾で被ばくした子どもたちの医療支援を中心に活動。それぞれ活動領域は違う団体だからこそ持っている特徴や強みを生かしていること、ゆるくつながりながらの関係性が活動持続のポイントでしょうか！ 今後も一緒に取り組みを進めていきたいと考えています。（吉澤）

J

CNCからAPL Aへ移行した後のネグロスでの活動を中心に牽引してくれたアルフレッド・ボデオス（愛称アンボ）さん。KFRRC設立もアンボさんなくして成し得なかったと思います。2016年1月に急逝されましたが、今はアンボさんのスピリッツを引継ぎ、若者たちが頑張っています。3人からのメッセージです。

エリマー・トグハツ

KFRRC事務局長

初めてアンボさんに出会った時は有機農業がどれほど重要なものなのか、自分たちの生活がど

私にとってのアンボさん

れほど環境や社会につながっているのか、十分に理解をしていませんでした。研修生としてやってきた時、その目的や、なぜ研修生としてここへ来たのか本当には分かっていなかったと思います。その後アンボさんから多くのことを学んでいくうちに、ここでの学びは農業だけではなく、仕事、生活全てに関わっていくものであることに気づきました。2009年からアンボさんと共に仕事をしながら、彼の視点、行動、言葉から学ぶことがたくさんあり、それらは今の生活、人生につながっています。本当に感謝をしています。ありがとう（寺田）

ジョネル・ベントウラ

KFRRC副事務局長・養豚担当

アンボさんは私を成長させてくれました。ときに厳しく指導を受け、仕事をサボっていた時や時間に遅れた時などはとても怒られました。けれど、上から下に命令だけをしているような「ボス」という存在ではなく、今何をすべきなのかを教えてくれたリーダーでした。

農村部出身の私は、KFRRCに研修生としてやってきた時には、人前で何かを話すという経験がありません。緊張してしまっていました。アンボさんは何度も人前で話す練習の機会をくれて、自分を少しずつ成長させてくれました。一歩ずつ私の一人立ちに向け、たくさんのことを教えてくれたアンボさんには本当に感謝をしています。

寺田俊

APL A事務局スタッフ

あまり多くを語らない、手取り足取り教えないと、ささづいてくれます。ね、アンボさん。

APLAのサポーターたちからメッセージ!

APLA10周年を迎えるにあたり、
日々APLAを応援して下さる皆さんからメッセージをいただきました!(敬称略)

伊藤 徹 / いとう・てつ
沖縄大学地域研究所 特別研究員(マニラ在住)

APLAが生まれた翌年、マニラで開かれたあるコーヒーイベントの会場で私はグレッグと偶然出会いました。(「APLAのフィリピンのパートナー」としてハリーナに何度か登場したあの「グレッグさん」です!)そして彼との交流をきっかけにAPLAと出会うこと。二つの出会いが行く先を明るくしてくれました。「人と人がつながれば、世界は変わる」——やはり、そこに希望をみます。



年2回開催しています。その際、バランゴンバナナやコーヒーなどを販売し、収益の一部を「バナナ募金」へと寄付させていただいています。「顔が見える」APLAの活動は、遠いと感じていた国や現地をぐっと身近に感じることができ、それがとても嬉しく、マーケットを続ける活力になっています。これからもいろいろな活動を通じて共生の輪が広がっていくことが楽しみです。

ぐるぐるマーケット実行委員会
飯能市で乳幼児~20歳と幅広い子どもたちを育てながら「子育て世代を中心としたマーケットを行いたい」「子育て中でも何かワクワクすることをしたい」とそんな思いで集結した団体です。
URL: <http://park.geocities.jp/gurugurumarket/>



大友一男 / おおとも・かずお
APLA賛助会員

APLAの賛助会員になったキッカケは、JCNCが関わっていた雑誌「at」に興味を持ち、読み始めた事です。理念が一人歩きし、上から目線を煙たがられるNPOとは違い、APLAには、事務局スタッフを始めとする気さくなメンバーが多くいます。おかげで、生来の怠け者の私も、気張らず、適度なストレスとともに、楽しくAPLAを応援できています。



下田寛典 / しもだ・ひろのり
P-nong Learning Center共同代表、
日本国際ボランティアセンター タイ事業担当

JCNCの蓄積の上に、「支援する/される」関係をこえて、実践者同士を「繋ぐ」ことに徹底して来られたことにAPLAの矜持を感じ、そこに共感してきました。いま20代、30代、40代の若い方が事務局を担って、活動を進めてこられていて、社会運動のリレーが現在にもきちんと引き継がれていることは同世代として素直に嬉しいです。APLAの活動地の方が日本に来る機会に立ち会いましたが、「繋がる」感覚を強くさせてくれました。常に会えなくても、バナナやチョコレート、オリーブオイルを通して、海の彼方に、豊かな未来を残そうと汗を流す人がいることを感じられます。



武原龍晟 / たけはら・りゅうせい
会社員

私がAPLAを応援し始めたきっかけは、大学1年生の時にネグロス島のKF-RCへ行ったことです。滞在中は、現地の農業事情や生活スタイルなど日本とフィリピンの違いを多く学ぶことができ、貴重な経験となりました。お世話になったAPLAの職員さんやファームの皆さんへの感謝の意味も込めて、帰国後すぐにAPLAの会員となりました。会報などでファームの様子や



鬼木のぞみ / おにき・のぞみ
ネグロス・キャンペーン岡山

APLA10年間で嬉しかったこと。
①パプアのカカオと出会い目からウロコが落ちる思いをしたこと。何よりチョコが美味しいです。②私自身は「from ネグロス」で、アジアの皆さんといっしょに舟にのって炬燵を漕いでいる実感があります。『ハリーナ』が待ち遠しく、心楽しいです。③ネグロスと日本で若い世代の皆さんががんばっていること。そしてセンスがいい(^-^)。☆未来への希望にあふれていると思います。



長谷川順子 / はせがわ・じゅんこ
ぐるぐるマーケット実行委員会

わたしたちは子育て世代を中心としたマーケットを3.11以降、

活動を知るたびに当時を思い出すことができるので、毎号読むのを楽しみにしています。

佐藤友子 / さとう・ともこ
キッチンハリーナ

先日、APLAスタッフ野川未央さんをお迎えして、「珈琲の向こう側~東ティモールは今」という学習会をしました。様々な困難はあるけれども新しい国づくりを進めている東ティモールの人々の逞しさを感じ心打たれました。「アジアで暮らす私達がどう手を繋ぎあって生きていくか、一緒に探していこうよ」と呼びかけられてもう10年になるのですね。あれから草の根は土の中で着実に広がっていることを実感したひと時でもありました。APLAの活動をいつも応援しています。



キッチンハリーナ
京都府京都市左京区北白川西町85-4
URL: <https://kitchen-halina.jimdo.com/>

フレッシュコーヒー No.1
自家焙煎珈琲屋

APLAさんとは民衆交易の商品をきっかけに御縁を持たせて頂きました。この活動の輪がさらに大きく広がっていくことを心から願い、スタッフ一同、微力ながら今後も応援していきたいと思ひます。



フレッシュコーヒー No.1
新潟県柏崎市東本町1-2-5
URL: <http://f-coffee.net/>

澤田千晶 / さわだ・ちあき
La Granda Familio(ラ・グランダ・ファミリオ)

APLAさんと出会って5年目になります。バランゴンバナナやマスコバド糖を使ったグラノーラを美味しいと可愛いと選んで下さる方が、実は支援をする一人となる。という場面がわたしは大好きです。「一歩進んで二歩下がる」の時も、PtoPニュースを読んで自分のこと、事業のことを見直しています。応援していると思っている私たちがAPLAさんに支えられています。



La Granda Familio(ラ・グランダ・ファミリオ)
大阪市北区中崎西1-1-18
tel: 06-6136-7811
URL: www.grandafamilio.com

アリッサ・パレデス / Alyssa Paredes
大学院博士課程(米国在住)

私は人生の大半をフィリピンで過ごしていますが、首都のメトロマニラの外の世界に踏み出す必要性を感じていませんでした。けれども、研究者として、2014年にAPLAとつながったことが自分の国に戻り、これまでとは全然違った、そして刺激的方法でフィリピンのことを学ぶきっかけになりました。APLAの歴史を学び、民衆交易のネットワークに導かれて、ピサヤやミンダナオ、そして最終的には日本にまでたどり着きました。そしてフィリピンと日本の多くの友人と出会ったことは、以前には想像もできないことでした。現在私は、大学院の博士課程で、フィリピンと日本の関係性についての研究をしていますが、そのきっかけくれたのはAPLAとの出会いです。そして、このような私の経験は珍しいものではなく、APLAという団体が、多くの人、特に若者に対して可能にしていることだと信じています。



特定の地域の人びとと長期的な関係性を築いて協働をつづけていること、若者との取組みに力を入れていること、持続可能な農業にもとづいた地域間の連帯をビジョンとして掲げていること、それらがAPLAの活動を際立たせていると思います。NGO業界の中でも、長期的な貢献と草の根の動きは貴重なものです。私がAPLAを応援しているのは、APLAがめざす未来像を信じ、同じ思いを持つ方たちに仲間に加わってほしいと思っているからです。

この素晴らしい組織の今後の取組みの成果を目にするのを楽しみにしています。友情と刺激に感謝し、10周年という記念の年に心からの祝福を送ります。

アユス仏教国際協力ネットワーク
認定NPO法人

APLAとは、2011年からNGO組織強化支援と東日本大震災関係などでお付き合いがあります。人と人をつなぎ、そこで生まれる力のすごさを知っているためか、関わる人たちに常に真摯に向き合っている気がします。扱っている商品が、貿易システムを変えた結果の単なるモノではなく、人が人との関わりの中で生み出した温かさがある物なのも納得。ちなみにAPLAが販売するホットチョコレートは、日本一だと思います。あんなに美味しく仕上げる秘訣はチョコレートパプアにあるそうなので、関心のある方は会員になって聞いてみてください。

**認定NPO法人
アユス仏教国際協力ネットワーク**
東京都江東区清澄3-4-22
tel: 03-3820-5831
URL: ngo-ayus.jp



今回APLAの10年を振り返りましたが、10年は長かったような短かったような…。APLA設立準備のころにATJから移動してきて、立ち上げと一緒にやった大橋成子さんに「仕事が業務的。もっと柔軟になりなさい…」なんて言われたことを思い出します。そして、本当に色々やってきたな～というのが実感。時々活動が多岐にわたり色々なことが追いつかない時もありますが、団体の名前の通り様々な人々と「つながる、つなげる」をやってきたのかな、と思います。時代と共に形やスタイルは変わっていくと思いますが、これからもJCNCから引き継がれるエッセンスは忘れずに進んでいきたいです。この10年間一緒に関わってくださった皆さん、ありがとうございます！そしてこれからもよろしくお願いします。(吉澤)

APLAの10年の活動を振り返った記念特別号、いかがでしたでしょうか？単なる活動報告にならないように、工夫を凝らしたつもりです。特に「良いこと」だけを伝えるのではなく、失敗や苦勞もきちんと語るように意識しました。それにしても、どのページ(=どの活動)も文字数をギリギリまで削るのに苦勞しました。それくらい多くのことをやってきて、伝えたいことも山ほどある、ということですが、デザインのリポーターさんにはかなり苦勞をおかけしたと思います。アジア各地、日本各地でつながる仲間・サポーターの皆さんからいただいたメッセージに大きな力をいただきました。今後もAPLAをよろしくお願いします！(野川)

ハリーナ HALINA

2018年5月号 vol.02-no.40
2018年5月10日発行

【編集者】
吉澤真満子
野川未央

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人APLA
(APLA/あふら: Alternative People's Linkage in Asia)
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
(tel.) 03-5273-8160
(fax.) 03-5273-8667
(e-mail) info@apla.jp
(URL) http://www.apla.jp

【印刷】
株式会社ミック

事務局だより

事務局の動き (2018年2月～2018年4月)

2月 2日、3日	豆マルシェ出店&カカオワークショップ開催。
2月 2日～14日	渋谷ヒカリエ「ショコラZakkaフェスティバル」に出店しました。
2月 6日	学芸大学附属高等学校・校外実習で授業をしました。
2月 7日	パルシステム埼玉(所沢)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
2月 7日	WE21相模原で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
2月 7日	パルシステム東京(狛江)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
2月 9日	千代田区立九段中等教育学校で授業をしました。
2月 22日、23日	第16回BMW基礎セミナーに参加しました。
2月 24日	理事会・評議員会を開催しました。
2月 26日	「脱原発を決めたドイツと福島について語り合う」withミランダ・シユラズさんをアユス仏教国際協力ネットワーク、JIM-NETと共催で開催しました。
3月 4日	大地を守る会オーガニックフェスタにチョコレートアライアンスとして出店しました。
3月 4日	東京朝市アースデイマーケットにPtoPカフェで出店しました。
3月 6日	パルシステム東京(東村山)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
3月 10日～22日	東ティモールとインドネシアに野川が出張しました。
3月 11日	アユス主催「311バザー&思いを馳せるつどい」にPtoPカフェで出店しました。
3月 12日	鎌倉学園で授業をしました。
3月 16日	パルシステム埼玉平和募金贈呈式に参加しました。
3月 12日	全国消費者大会・分科会「食べることから見えるエシカル～カフェで語ろう」に参加しました。
3月 17日、18日	コピス吉祥寺マルシェに出店しました。
4月 1日	東京朝市アースデイマーケットにPtoPカフェで出店しました。
4月 5日	「ホンモノの手作りチョコレートを広めるカカオ大使になろう!」の講座を開催しました。
4月 12日～27日	フィリピン・ネグロスのKF-RCからスタッフのチータ・タカタさん、ジョネル・ヴェントウラさんが来日し、岡山、札幌、東京、山梨、岐阜を訪問し交流しました。
4月 14日	理事会・評議員会を開催しました。
4月 21日、22日	アースデイ東京2018にATJと共同で出店しました。
4月 25日	「ホンモノの手作りチョコレートを広めるカカオ大使になろう!」の講座を開催しました。

事務局からお知らせ

APLAマンスリー募金スタート

APLAでは、新しいサポーター制度を導入し、新たに「マンスリーサポーター」と「APLAサポーター」を募集しています。ぜひ、知人の方へのお誘いをお願いします。リーフレットが必要な方には郵送いたしますので、事務局までご連絡ください。



2018年度は『ハリーナ』の発行が3回になります。

今号40号は、APLA設立10周年を記念して特別号として増頁でお届けしました。このため、8月発行をお休みし、次号41号は11月にお届け予定です。発行回数が減ってしまいますが、41号以降も充実した内容でお届けできるように準備してまいりますので、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

★『ハリーナ』のバックナンバーがウェブサイトでもご覧いただけます。

最新号発行に合わせて前号を掲載しています。「ハリーナ」を紹介くださる時などにご活用ください。
<http://www.apla.jp/archives/publications>

APLA 10年にあたって——共同代表からのメッセージ



足田美津子
ひきた・みつこ

11年前、日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC)の活動を引継ぐ新たな組織の名前は何にしようかと会議で話し合っていた。なかなか決まらず考えあぐねていた時、今は亡き加地永都子さんが「やっぱり、めざすのはアジアの人びとの Alternative Linkage (アトナティック・リンク) と言って、シスターフィロ(弘田しずえさん)が「そうそう」と同意し、その後、すんなりAPLA (Alternative People's Linkage in Asia) という名前に決まった。お二人ともJCNCの22年間を初めから支えてこられた方々だ。「あふら」って何? と聞かれた時に一言で説明できず、今の事務局を困らせている名前だが、「アジアの人びとの新たな(より良き)つながり」を指している。

ネグロス島の飢えた人びとを救おうと緊急救援から始まったJCNCの活動だが、やがて、サトウキビ農園労働者を構造的飢餓から解放するために、自立的な農業・農村づくりをめざすことになる。日本から規模



秋山眞兄
あきやま・なおえ

1986年から始まったネグロス島との民衆連帯運動は、飢餓と内戦という厳しい事態の中で、とにかく人びとを助けようと、しやにむにプログラム、プロジェクトを展開し続けた。失敗するものも多かったが、よくもあれほどのことができたもの

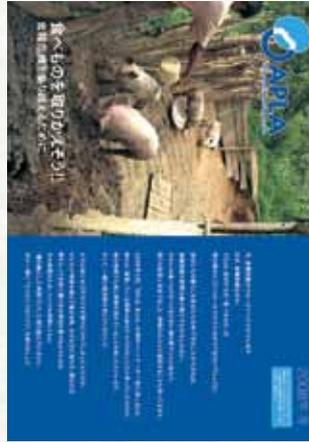
気象変動であれ。確かに、APLAが歩んだ10年の間に、世界の見え方が違ってきた。APLAのアプローチの仕方に特徴的なのは、現場主義、そして個々の人びとの交流である。それがAPLAのパワーの源泉だ。これは、ネグロス島で栄養失調の赤ちゃんを抱いた日本の女性たちの声から緊急救援が始まったJCNC以来変わらな

パス(KFIRC)の取組みだが、初めての研修農場ではなく、1988年にツプラン研修農場を開設している。しかし、個々の研修生との関係は希薄であった。対して、KFIRCでは、APLAの担当スタッフが研修生・卒業生の仲間の一人になっているとさえ思われる。東ティモールでは小さなプログラムを重ね、担当スタッフと、今後リーダーに育ってくれるだろう現地の若者たちとの間に、強い信頼関係が醸成されている。そして、国境を越えて若い農民たちが出会い、互いに理解しあうとともに、それぞれが自律的な目標をもって歩もうとしている。また、日本の近代以降の歩みを根底的に問われた福島原発事故に対し、APLAは「農」の視点から考え、現場の人びととつながり、交流し、歩んでいる。

APLA CAMPAIGN NEWS collection

毎年11月に募金を呼びかけるために作ってきた
キャンペーンニュースで10年を振り返ります。

2008年



食べ物を取りかえそう!!
食糧危機を乗り越えるために

2009年



地域を元気にしよう!

2010年



アジアでポコポコ種まき中

2011年



人と人がつながれば、
世界は変わる。

2012年



素手と水牛だけで、
ここまでできたんだね!

2013年



君たちが、バグアサだ。
希望

2014年



暮らしを変える、
未来が変わる。

2015年



土に根をおろし、水を守り、森と生きる。
そこには無限の可能性が広がっている。

2016年



この笑顔を守りたい。

2017年



学びが人を変えて、
未来をつくる。

ハリーナ HALINA

2018年5月号 vol.02-no.40 2018年5月10日発行 頒価 300円(税込)

【編集・発行】

特定非営利活動法人 APLA (APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15 サンライズ新宿3F

(tel.) 03-5273-8160 (fax.) 03-5273-8667 (e-mail) info@apla.jp

(URL) <https://www.apla.jp>

APLAの活動を応援してください。

月々500円からサポーターになって
APLAとつながる!

APLAでは、会員(年会費5,000円)の他、新たにサポーター制度を導入し、「マンスリーサポーター」と「APLAサポーター」を募集しています。詳しくはwebsiteをご覧ください。リーフレットが必要な方には郵送いたします。

問い合わせ・お申し込み

APLA事務局にご連絡いただくか、下記のwebsiteからお申し込みください。QRコードからもアクセスできます。

<https://apla.secure.force.com/>

